沼田
神田柳山古蔵
今村小時逢記

田沼騒動序

人として家を重んじ名を惜むは至當の事なれど
も就中昔への武士が活達ある氣性の上に刄を腰に
帶つゝありて尙怨みを忍んで穩便を計たるも全た
く其の名其の家を重んじたればなり已に張り裂く
ばかりの胸を擦り鳴り出るばかりの腕を撫して忍
んでも猶忍ぶ能わずして遂に白刄を振ふに至るは
實によく〳〵勘忍袋の緒の切れたりといふ場合に
して誠に已むを得ざるに出るあらん世人動もすれ
ば只武士の勇氣を示さん爲に一言を交へて直ち
に一刀を拔放つ如くにいへども其の名も家もあき
青武士の爲す所にして眞に武士たる者の前いふ如

くよ〳〵の場合に至らざれを決して安りゝ疎暴の擧動をなしたる者にあらざりしと信ず見よ淺埜内匠頭が吉良上總介に對する殿中刃傷のごとさも内匠頭が堪ね〳〵し末終に事の茲ゝ及びたりしあり本編の主人田沼に對する佐野源左衛門の刃傷も又然りとす苟くも命を捨て家を抛つて以て茲に至るには如何に悲しむべき事のありしか如何ゝ怒るべき事のありしかを到底思い量るべからず請ふ讀者本編を繙いて其の實情を知り玉へと爾云

竹蔭居士識

特7
77

田沼騒動

第一席

神田 今村 山口 錦 記

田沼騒動

只今は枝葉さへあれば大臣參議にも出世が出來ますけれども川越の時分には先祖の奮功に依て一万石は一万石千石は千石迄かでも吟味でも親に讓られたばかりを貰つて居て山のやうに借金があつても決して大名旗本は借金で失策る事はおいゆえ實に安泰のもので其代り百姓から旗本にあると云ふ事も出來おい然るに其德川樣の時分に伊豫國松山の百姓で惣右衛門と云ふ者江戸表へ出で仲間奉公を勤めて居て御家人の株を買て段々出世をして松山伊豫守となつて長崎奉行を勤めた人がある下總の野田と云ふ所から出て旗本になつて野田下總守と云ひ野田の名物は下り藤だと云つて定紋に下り藤を付けたお方もある田沼主殿頭と云ふ人は百姓の倅で一代に四万七千石になつて御老中を勤め倅

山城守と云ふ者が若年寄を勤め御親子を御老若を勤めるゃに時めく勢はいでございましたが館からざる廉数々あつて佐野彦左衛門殿中にて刃傷をして田沼山城守を切倒しました親父さんの主殿助と云へる人は一万石に減地仰せ付けられ尤とも改易にもあるべき所であつたけれども八代九代十代の三代將軍に御奉公をした功に依て一万石減りました抑々殿中刃傷と云ふは備川様十五代の内に十二度ありました北内に御立派の刃傷と云ふは佐野藤左衛門にて北藤脇から申し上げまする紀州日の高郡御坊村の百姓で千左衛門と云ふ者人には道楽がある者で此人の道楽と云ふのは書物を見るのが道楽最初お寺のお住持に数はつてゥア面白くなつて地ら寸三度の食事を二度にして一度ぶり取て盗て城下へ行つて細めて本を買う暇には往かないが端本を買て来て繰る目も繰ゃに是を讀み又用に行くにも懐中へ本を入れて行つて休憩の間にも書物を見て居りましたが天の高いと云ふも地の厚ひと云ふも森羅萬象文字にあい間はないゆえ夢ばされば思なりと云つて脱とに結搏な道楽だ夫を離云ふとあく千左衛門の事を字引と云ふ綽名を付けた名主様に聞ても知れない手習ひの先生の所へ行て聞ても知れない其時分には千左衛門の所へ行て聞ば直ぐに分る難かしく聞ば斯う云ふものの名と云つて教へて呉れるソコデ北御坊村の旦様を斯う云ふものの名と云ふのは五百石取て居て田代三左衛門と云ふ人でどうか是を家来にしたいと思ふから屋敷へ呼んで御術を教へたり或いは若物を呉れたりして目を掛てやつて居りました其田代三左衛門のお迎合ひのお兄様に菅沼半左衛門と云ふ人成一日田代の所へ来てお酒を飲んで居りましたが北藤一千左衛門を呼んで融走を致し菅沼半左衛門が 半「時に千左衛門お前は何時までも斯うやつて居る了御はあるまい農工商の上に立つて人と云へば武士花と云へば櫻何と武家様公をしたら宜からう 千「エヽ誠とに有難き仕

合せでございますどうか私くしも武家奉公をしたいと思つて居りますゆえ「うんおらば私が家來にしやう相當の扶持をやるが菅沼半左衛門の家來にあつてはどうだ」スルと田代三左衛門が三「お兄様少し待て下さい千左衛門は私しが家來にしたいと思つて是まで目を掛て居てやつたので所を横合から貴所に連れて行かれては困ります半「さうか夫では前の家來になつても私が兄弟の事ゆえ私の家來も同様私の家來になつてもお前の家來も同様おものだ兄弟の間柄だから何方が宜いか當人の了簡を聞て見やうではないか……千左衛門決して遠慮には及ばんから田代の家來になるとも菅沼の家來になるともお前の決心した所を云はつしやい千「誠とに思召しは有難う存じますがどうも只今即答はなり兼ねます三「即答が出來ないと云ふは決心が悪いと云ふもの人間は何でも決心の悪いのは一番往かん菅沼の家來になると云へば田代に對して氣の毒又田代の家來になると云へば菅

沼へ對して氣の毒だと云ふ事が出るからさう云ふのだらう夫は婦女子の了簡で取るに足らん事だお前も男ゆえヒタリと決すると所があるだらう千「夫ならば申し上げますが婦女子の了簡と仰しやるなれば決定致して居る所を申し上げます依に鶴は松本に巣を食はず良禽は木を擇ぶと申しますから苦樂を倶にしやうと云う主人は撰ばかければなりません三「夫は勿論だ千「失禮な事を申すやうでございますが田代様も菅沼様も私くしの主人には不足でございますからお斷はり申し上げます物は遠慮と云ふのがあるから夫で私くしは即答はなり兼ると申し上げましたが強てとの仰せゆえ心の中を打明けて申し上げます三「成程良い決心だお前位お出來れば我々両人では不足だらう夫ではお前は誰の家來になりたいと云ふ目的を付けた線あつて田代の御分から出たものだから周旋をしてやらう千「夫は有難い仕合せで先づ此大日本の内に私くしの御主君に仰ぎ奉まつると云ふ

力は其熊野君の曾孫樣にお當り遊ばす當紀州の新之丞樣より外には「ございません」と聞て兩人感心をして早速新之丞樣へ申し上げると直ぐお召抱へ相成るとの事故ては只千左衛門では從かん苗字を何とか付けなければならん千左衛門に其事を云ふと千何に分宜しく翻ひますと云ふ三夫では熊谷から出た熊谷の次郎或いは榛澤六郎、江戸の五郎川越の太郎又は岩清水の八幡神前に て元服をして八幡太郎殿の天神の神前にて元服をして納の平太などい夫々地名を付けたるのだからお前は御坊村から出たゆえ御坊子左衛門と云つたら宜からう千「御坊」と云ふのはふ可笑うございますが三「でもセンかイモノはゴボウだ千「御冗談を仰しやらないでどうかモ少々良い苗字を付けて下さいまし三夫では所うしたらどうだ木下藤吉郎と云ふ人は丹羽五郎左衛門の羽の字を上に付けて藤田の上の字を取て羽柴と云ふ苗字を付けた田代の個分から出たから田の字を付けて管沼の沼の字を取り田沼千左衛門としたらどうだ千「餘り面くもないが併しまアまあ田と沼は何所へ行つてもあるものだから夫ではさう云ふ事にしませうとヨッコて田沼千左衛門と名が付きまして紀州の新之丞樣へ御奉公を致しました其内に七代樣御他界に相成てヤア尾州か八代にあるか紀州か八代にあるかと云ふ時に尾州樣は何でも私が八代にあると云つてお樂しみになつて在らしつた所紀州にも紀州の吉宗公お乘出しと極つたソコで尾州樣は立腹をして宜し〳〵夫ならば新將軍を討取て呉れやうと中仙道東海道とも に充分固めを致して紀州吉宗公江戸表へ乘込みの途中で討取て呉れんと待構へたる樣子扨は大變さうあるまいかと國々の人々も心配を致し御家來方が盛ら御警見をしても中々聞入れないソコで吉宗公は御病氣と云つて一時江戸表へお乘出しの備御延引にありましたけれども將軍になり立て早々病氣と云つて何日までも國に退て居る際にも往かない大らに御心配をして居らつしや

る其時に田沼子左衛門御病氣御全快の樂法書を差上げると云つて何やら認めた物を差上げました吉宗公是を御覽にあると聞もなく御病氣御全快と云ふ事にて晩てお立の支度を遊ばし紀州和歌山より田丸越へをして伊勢の白子へ出で白子からお船に召して海上を三州吉田へ着致しました吉田のお城へ一泊して夫から東海道を下に〳〵と云つてお乘込みになる夫までは副將軍小石川様御本丸にあつて政治を司取つてお山でにありたが紀州様御乘込みになつたから跡々万々お引渡しにあつて水戸様は小石川お館へお歸りにあるお意がある將軍家御上京になつたに就て恐悦の御禮に國々より罷り出でるソコデ今申し上げた尾州の宗治公お落ろきなされ東海道中仙道とも殿重に手配をして置し に何日の間に江戸表へ着したか手ケ時參りか金比羅參りの樂にでもあつて參つたかと御立腹遊ばされると御家來が　家「イヱ中仙道を越した時そはとざいません　吉「どう致したのだ　家「白子

より船に乘つて海上三州の吉田へお着にあり御一位あつて夫よりの江戸へお乘込みにあります　宗「是は氣の毒かん事を致した夫では伊勢の二見ケ浦の二ッの岩に綱を付けて津多郡の海へ引張て置ば宜かつたと仰しやつたソコデどうも御の差圖を受るは是だとあつてプツリお髷を切り自から殘念坊と名前を付けました是は殘念だと云つて坊さんにあつたから殘念坊北時に出來た落首が

駒にあをめの御紋黑小袖
御色の白い黄あの服機

切此お方は放埒に身を持崩して吉野太夫と云ふのを身受けして將軍様お成り先きへ立つていろ〳〵な妨げをおすつたけれども八代様は御仁君でありますから一向取合はないで事を濟して仕舞ました其時に千左衛門五百石となつて三田の雲人坂下へお屋敷を賜はりました正月元旦八代様御子を開けさせお庭の風呂

を御覽におつて大福の茶を立てろと仰せられました「ハッと云つて大福の茶を差上げる下方の是は福茶でとさいます大晦日或いは節分に呑む茶を福茶と申します何も節分や大晦日に限つた事はない常々上がれば鹽とに結構なお茶で梅と云ふ物は邪氣を拂ふ物山椒は胃の補ひを助けるから昔しの智者の考へ置た事で北福茶を召上がらうとした折に梅の古木に鶯が三音を囀りました此三音と云ふは張り揚げて鳴くを上げ音と云ひ調子を下げて鳴くのを下げ音と云ひ中半に鳴音を中音と云ふ是を三音と申し谷渡りと云ふは鶯飼ひの方では餘り能くないのださうで一日の卦は朝にあり一月の卦は朔日にあり一年の卦は元朝にあり年の初め月の初め日の初めなる元日は最とも大切の日で其元朝に大福の茶を上がりながら鶯の三音を聞て此上もなく悦ぶんで居らせられましたが忌は也其鶯に必取られてお待ちあさつて居たお茶椀をパッタリ下に落しました其途端に茶椀が二ッに割れて

壁へ茶が流れる時に八代様は鶯の三音を聞て喜ぶ甲斐もなく忌々しい事であると其茶椀を睨附て在らせられました其時に田沼千左衛門が黒形の短冊にサラ〳〵と一首認めて千恐れながら祝し奉つると言つて差上げましたお氣に入りの千左衛門だに依て何事だと短冊を取上げて御覽になると

日の本も高麗唐土も一掴み
お名の弘まる君の大福

是を御覽せられて大きに喜とばれ側へにあつたお脇差を下し置れました是が千左衛門の出世の初まり頓智即智と云つて人と云ふ者は怜悧に生れたいものだ太閤秀吉は那の位のお方だけれども大切にして居た庭の松の木が枯れました是をお氣になすつた時に傍らに居た細川幽齋が祝ひ直して上げました

御稚藏のお庭の松は枯れにけり
千代の齡いを君に讓りて

又大坂に開替屋があつて正月元日の事で門松へ十八九の新造が寄り掛つて癇癇で死んで仕舞た主人が大層是を氣に掛て是はなうも氣に掛る事で元日だと云ふに門松へ寄掛つて人が死ぬなぞゝ云ふのは縁義が悪い其頃有名のたゝや貞眠と云ふ者の所へ番頭が參つて　番「主人が氣に掛て居りますからどうか一ッ觀ひ直して頂だきたいもので　貞「宜しい門松に憑れて泡を吹くの神　是ぞ眞との辨才天かあ

蜀山先生に一ッさう云ふ話しがあります成大家の主人が八十賀の祝ひの巻と云ふ餅を拵らへて諸方へ配つた夫が大層餘つたから殺つ殺つたと聞と氣の利かない小僧　小「旦那様四十九餘りました主人が大層氣に掛けて四十九日の祭物と云ふ事があるのに蓬の餅が四十九餘つたと云ふのは氣に掛る其話しを太田先生が聞て　太「宜し〳〵　俺が配つてやらうと矢地金の短冊へ書て下す

「つたのは

七ッゴヽ七福神に配らばや

歌は四十九あらう賀の餅

是を見て大層主人が喜こんだと云ふ話しがございます誠てさう云ふ譯ぢに依て千左衛門が朝夕の側を離れず御奉公を致し益々御意に叶つて居りまする成一日八代の上様品川の東海寺へ成りかあつてお詣り三田の魯八坂を下つて參りましたスルと千左衛門の屋敷の表門の前の所に家中の小供が大勢集まつて居る所へ黒羽織を着た人がお辯い〳〵と譯を掛て來たので一同門内へ飛込んで仕舞た時に千左衛門の伴龍之助と云ふ七ッにあるお子が門の節穴へ人差指を突込んで遊んで居た何で人差指を突込んで居たかと云ふと蟯蛔有子がヂイ〳〵と鳴く癖是ない小供の事ゆえ是を取らうとしたので「蟯蛔有子は茶虫をじして我が子にし茶虫を自分の穴へ入れてヂイ〳〵と鳴て居たから自然と茶虫は

鰻鮲有子とおつて仕舞ふいろ〳〵變化をするもので蘆草化して蓋とある鯉海中に入つて鮲となり田鼠化して鶉とあり芋虫は鱧になり山の芋は鰌にあるなどと申しますが今鰻鮲有子のヂイ〳〵鳴て居る穴の中へ龍之助指を入れて居りまする所へ上様がお出でになつたものだから周章て指を抜うとしたが抜けおいソコヂ駄差を抜て人差指を切て門内へ駈込んで行て仕舞た夫を誰も氣が注かおかつたが早くもお龍の内にお在でになつた上様がお氣が注て　上「那れに血が流れて居るが誰の屋敷ぢやア　家「此度紀州よりお供致しました田沼千左衛門の拝領屋敷でございます　上「さうか、立寄ると仰せられたサア千左衛門の屋敷は不意のお成りであります　家「さうでありますから上を下への混雑其内に千左衛門支度を致して玄關へ出で迎へまするとい事がある只今門前を通行致すと血が垂れて居る予が通行をするに就て怪我でもした者があるならば手當を致して遣はせ

第二席

若し予の爲に怪我でもいたした者はなきか早速取調べろとの事　家「さ御一言にうの者を段々調べまするとと一人　○只今若様が血だらけにおつてお庭の方へ入らつしやいましたと云ふから尋ねて見ると龍之助は指を握つて下を鬱むいて居り着物が血だらけにおつて居ります　千「どう致した　龍「斯様〳〵で指を切りました　千「ムウ身体髮膚父母に受く敢て毀傷せざるは孝の初めなりと申すに何で其指を切つた　龍「左様でございます常々お父上の仰せられるに武士は忠義を先きにして孝行を跡にしろと仰しやいました　千「さうだ　龍「何分鉄穴に入れました其指が抜けません所へ上様が入らしつたに依てお目觸りになつては相成んと心得まして脇差を持て切りましたお成り先きを穢血を以て汚し申

に恐れ入りました宜しく上様へお詫を願ひます是を聞て我が子があらる成心をして千左衛門早速其趣むきを上様へ申し上げると　上早々醫者を呼んで指の傷の手當をしてやれ　千パッと夫から直ぐに醫者を招いて手當てを致し上様の御前へ龍之助を召され　上同じ事なら龍之助今日より龍助と名前を改めろ龍は一陽來復の時を得て雲水を待て昇天をなすと云ふ沼て滅美を盡はすと仰せられてお歸りになりました七八日經つて支配頭へ招かれ出した千左衛門何事かと思ふと上に思召し是あり龍之助事龍助新地七百石下し置るゝやうも千左衛門は雀躍をして喜ぶんだ御自分は五百石だが伜は七百石夫から始終上様の傍はらに出て奉公を致して居る上様の傍はらに出ますのをお對手番と稱へ御老中御登城をおさるお供先きを突切つても構はないと云ふの は上様の御用があつて町方へお使ひに行く事があるか分らん元龍助も餘には御密中にもなる位あの人で在らつしやるに依て

蛇は一寸にして雨を降せる十歳末滿の時より乘人に秀でゝ居る一日上様が上野東叡山へ御參詣があつたで只今の御成街道を掛りなさつて行らつしやるお旗本の屋敷に曰窓と云ふ窓がある曰と云ふやうな形になつて居る其窓から顔を出して家中の者が一人頻りに往來を眺めて居る所へ丈けの長い扇子を持て　○「ふ拂ひ〳〵」と云つて來るお手輕の時分だに依て下に居ろとも何とも云はない後には家々を閉めて仕舞てお成りの時には目張りと云ふものをして前日から當日は烟り止めと云ふ事にあつて兩國小路おどを御通行の時は芝居小屋親世物揚弓店などは殘らず戸を閉めて仕舞て一夜の中に原のやうにして人一人も道行をさせないさうしてお成りがあつたものでふ事にあつた前には手輕なもので段々後に增長してさう云入れやうとしたが頤が支へて這入らなかつたで其家中の人が窓から内へ首を其所へ上様が入らつしつて立つて見て在らつしやる　上是はどう　迂鳴て居る

も至極面白い中々那の首が這入らない顔が支へて這入らない是はどうも面白い當人は面白い所じやアない涙を流して眞赤になつて居るが急るから這入らない所へお側に居た田沼龍助の端へ來て　龍「首を左りへ曲げなさい左りへ曲げてお入れなさいかイと答へて首を左りの方へ曲げたから首は内へ這入つた上様は御感心なすつて　上「宜う氣が注いて教へてやつた前に首を曲げて表へ出して見て居たのに急に陷當前に入れやうとしたから這入らなかつたのだとお褒めなすつた時に龍助は以來斯う云ふ不都合があつてはならんと是からお成りの節は窓蓋を拵らへて致す事にしたら宜からうと云ふので其時よりお成りの時には窓蓋をするやうになつた或一日お成りの節本町筋を御通りになつた時に上様は商人家の前へお立ちなさつて頻りに斯う屋根の方を見て御らつしやるお側の者が　○何かお目に止りましたものがございますか　上「どうも町人には珍らしい大きな家だ中々大

きな家だと仰しやつた傍はらに居た龍助が　龍「申し上げまするやうな事を仰せられてはなりません　上「何故なるか　龍「上様がお成り先きでアヽ大きな家だと仰せられまするとお目障りと云つて取毀さなければなりませんアヽ高いと仰しやれば切り縮めなければなりません今一度仰せられますとるやうに　上「アヽ左樣かとお氣が注いて　上「夫は飛だ事を申した今度は大きい隣をおすつて　上「アヽ矮少いものだ矮少な家だと仰せられた夫でお取毀しがないで濟んで仕舞つた是は餘事のお話しだが十一代の將軍文恭院家齊公と仰しやるお方が市ケ谷御門外石小屋の所を通り掛るを高力と云ふ旗本屋敷があつて其所に今以てあるが大きな松がある其松の下を通り掛つた時　家「アヽ良い松だと仰しやつたソコでお目に止つた松と云つて其所に〆を張て仕舞た大森の山本屋と云ふ茶屋へ御休憩になつた時家の娘を御覽になつてアヽ良い娘だと仰しやつたお目に止つた娘

表向き亭主を持せる事が出來なひ何日何時上様へ差上げろと仰しやるか分らない内々ではあつたか知らんが此女は生涯極つた亭主を持つ事が出來なかつた芝の豆腐屋の娘でおらくさんと云うのがゐ目に止つてお妾に上がつてお子様をお持ち申した事があるから何日何時御上意があるか分らんから……

上「宜うこうけやうと仰しやつた然れば上様のお氣に入りとなつて居る龍助が町方へ出る時は上様の所へお土産を買て來る

上「龍助何か求めて來たか

龍「大福餅と云ふ物を求めて參りました

上「アヽ左様か袂から袋に這入つた儘出して見ると大きな大福

上「之は何程だ

龍「一ッ八文でございます召し上がつて御覽遊ばせ

上「さうか安い物だと仰しやつて召し上がつて見ると中々食べられない樣な餡の大福

上「是はどうも不味何者が食べる

龍「町人が食べます

上「アヽ感心な事ちや斯う云ふ物を食べて喜こんで居るあれは結構だ

龍「イエさう一樣には

申されません是を召し上がつて御覽遊ばせと取出したのは饅頭

上「是は何と申す

龍「醤麥饅頭と申します

上「何程だ

龍「一ッ三分でございます元は一分饅頭と云つては上等な物で夫を一ッ三分と云へば中々高直な物召し上がつて見ると砂糖の灰が抜いてあつて中々風味が宜い

上「何者が食べる

龍「矢張り町人が食べます下方の者が常に茶受けに致して居る位なでございます上が先きに御倹約を遊ばさなければ相成りません上を見習う下でございます

上「さうか宜う意見をして呉れた跡は何だ

龍「薩摩芋でございます

上「大層赤い大きな薩摩芋だな是は川越であるか

龍「イエ是で下總でございます芋の生國まで龍助は知つて居るサア增長をするに從がつて御意見をするが反つて御氣に入る或一日の事上様は龍助に向ひ遊ばして

上「龍助其方存じて居る通り悴家重は吃りだ何分那れには九代の將軍を相續させる段に往かんが二男三男を以て相續をさしたものであらうかどう

ちや若年者の龍助に御相続の御相談をなさる位ゐ龍助有難く承たまはつて居たが　龍「申し上げますエヽ御大老あり御老中あり若年寄あり君の御威光は異國まで歸服致して居りますお叱りあされば」と敢て動まらん非はございません御總領を御廢嫡になりましてなりますると御兄弟同志で不和に相成つて御家永續致しません御順當に家重公へ御相續仰せ付られ御差圖を申し上げまするは恐れ入りますが御次男三男は御分家御扣へ様と遊ばしてお宜しうございます　上「夫では左様致さうとあつて御相續は家重公がおさる西丸へお乘込みになり西丸大納言卿と申し上げました御次男と云ふのは田安御三男が一ツ橋と申しました清水様と云ふのは九代様の時に出來た是を舊藩時分には御三卿と稱へたソコデ西丸家重公はお喜こびなすつた我れは生れなから五体不具だ廢嫡にもなるべき所を龍助の一言に依て相續を致すやうになつたソコデ、お父さまにお願ひあすつて龍助をお貰ひ取りあすつた西丸様付きとなつた時にお父さんの千左衛門殿は病死致して三百石と己れの七百石を合して千石とあつた所へ千石加增をして二千石とあつて田沼主殿頭となつた實にどうも才の廻る事は上様が一通りならない吃りで仰せられる御意が分らない御機嫌伺がひに出る者か實にどうも困るソコデ主殿頭か側に居て通辯をする只今上様より何々と御上意左様お心得なさい斯う云つて呉れるから都合か宜いが主殿に惚まれると通辯をして呉れないさうあると人々困るから田沼の所へ進物を贈つて皆々詣らつて來る西丸様障子を指差し　西「ソコ〳〵ショッと仰しやるを開いて居る障子ならピタリ閉める閉つて居る障子ならスーッと開ける一日二十人ばかりお對手番御近臣が付てお庭を御運動なすつて居らつしやると泉水の所へ參りまするとザブり鯉が跳ねた夫を御覽なすつて西丸様は　西「コレ〳〵　西「コヽヽヽコイか跳ねたと吃つて居らつしやる

○「御意でございます」「鯉か跳ねましてでございます」「が餘程大きな鯉でございます」「那のコヽコイをコヽコイをと仰しやつた御自分では充分云ふ積りだか何所の機械か狂つて居るかロの處へ來るとモウ跳か出ないどうして氣が注つたか主殿か釣竿を持て來て針の先きへお饅頭の皮を付けて差上げたスルと西丸様は至極お喜こび遊ばして「トヽヽ主殿に限るトヽヽ主殿に限る」と仰しやつた夫を周章聞間違つてお泉水の中へ飛込うもの」ならたい思ひをしたりお叱りを蒙むつたり殊に依ると閉門にでもなる事と氣か利かないさう云ふ工合であるに依てお氣に入り度々御加增を頂戴致しました八代の上様御薨れと相成て西丸様九代將軍とかなんなすつた其九代様がお薨れになつて十代將軍家齊公御相續になつた八、九、十、と三代の將軍家へ御奉公致した廉に依て加增一万石となり若年寄となつた扨人と云ふしのは段々增て長をするもので若年寄になつて見ると云ふと御老中になつて見たい御老中とあると又御大老おならうと云ふのが人の慾だ『身の程を知る心』おう實船ものヽ數々積みかかずとも『主様』難かしい心だどうか一通御老中になりたい〳〵と思つて居た時に出羽の米澤上杉彈正大弼ゑ暇願登城相濟み近々發表へ下ると云ふ事に取極つた其時の上使と致して上州駒野郡高崎の城主安藤右京之進がお使ひを相勤める事に定まつた三代將軍様の時まで御近侍大名が參勤交代の時には八ッ山御殿小石川の白山御殿千住の小塚御殿是へお出張になりて出迎ひをしたものだ然れば其三御殿は今でも地名にかつて殘つて居る夫を御變革を仰せ出され三代様の時から出迎ひをしかつた其代りには御老中の一人が參府の節お暇の節御上使を勤める先き様でも山海の珍味を以て御馳走をおさるさうして御上使へ黄金を三枚引出物として下さる又御家來へも夫々相當の手當てがある實に勤めた御老中は名譽だソコデ主殿が將軍家の御前へ出でヽ

主「明日安藤右京之進上杉方

へ御上使を伺がひましてございます私くし父千左衛門は紀州日高郡御坊村の百姓千左衛門然るに私くしは只今におつて若年寄を相勤めて居りますが生涯に一遍御老中と云ふ大役を勤めたいと常々心得て居ります愚智短才に致して中々勤まり兼ますが明日上杉方へ私くしを御上使としてお遣はし下し置れますれば家名の誉れ家族の喜こび實に有難き仕合せにございます如何でございませうか内々伺がひ奉まつります」お氣に入りの主殿の云ふ事であるに依て　上「宜しい其方へ申し付ける安藤方へは断はるが宜しい老中の役を若年寄が勤めると云ふのが先例にあつては宜しくないが其方一代に一遍聞済むであらうから勤めろ」サア主殿頭は喜ぶんで家へ帰り其事を家内を始め悴にも云ふて聞せる皆大きに喜こび實に前代未聞寔に家の誉れであると喜ぶんだが喜ぶばないのは上杉の家だ御老中が勤むべき役を若年寄が勤めるとあつては家格に関はる今と違つて家柄を撰んだものであるから夫が先例にあつては大変だ何と致したものであらうと云つて御自身弾正殿の老臣をお集め遊ばして御相談になる其時に年七十三才長尾樓四郎と云ふ老臣があつた　樓「必らず御心配御無用御當家の恥辱にならんやう拙者が取計らひまする　上「宜いか　樓「お宜しうございますッコデ皆々安心をした翌日に相成りますると御親類の面々上杉家へお出でになり御親類が御玄関お露除けの所までお出迎ひをする殿様も同様お出迎ひをする夫れを今日樓四郎御親類の方々を奥のお座敷へ連れて行つて　樓「決してお出迎ひに及びませんと云つて唯一人仲間を連れて門前へ出で居りますす番手桶に水が汲んで左右に積んである御定紋の付てる高張り提灯は左右に立てて居るお掃除は勿論叮嚀に行届いて居る時に樓四郎　樓「コレ〳〵仲間　仲「ヘエ　樓「高張り提灯も番手桶も皆引込ましして仕舞へ　仲「夫でも今日は御上使がお出でになります　樓「何日もの御上使とは違うに依て差支へないから

引込まして仕舞へ　仲「畏まりました」と片付けて仕舞ひ　權「大層門前の掃除を奇麗に致したあるので念を入れてお掃除を致しました」權「今日の御上使は何日もの御上使と違うから此掃除をした所へ芥を撒て置け　仲「夫で折角掃除を致したのでも折角掃除を致したからとて私が撒けと云つたらさうするが宜い　仲「へエと仕方がないから芥溜めから芥を持て來てパラ〳〵撒いた　權「唯の芥ばかりでは往けない馬糞だの一古草鞋かぞを持て來て撒て置け唯の芥ばかりでは門前の芥が引立ない芥が引立つた所で仕方がない仲間も權四郎の吩咐だから馬糞だの古草鞋を拾つて來て撒て置たし　權「溝端の石垣の草を大層奇麗に孤つたな是では往かん元の通り草を植て置け夫から蜘蛛の巣を大層奇麗に拂つたな是も元の通り張て置げ　仲「どうも夫は困ります私くしどもには蜘蛛の巣を張る事などは迚も出來ません　權「アヽさうか夫は俺が氣が注かなかつたモウ是で宜いと御玄關式臺の所へチャンと座つて今や來ると待て居る所ろへ田沼主殿頭意氣揚々として乘込んで來る長尾權四郎一言の下に主殿頭に駐を與へるのお話し

第三席

主殿頭御上使を勤めた事なれども斯ういふ取り次ぎといふ者はないお客とも云はなければ御上使とも云はない門前に大提灯も出ておければ沿手樋も出て居ない不思議に思つて乘物から下り お草履取一人侍一人附て玄關の正面に掛りて來る舅斗目の麻上下赤銅作りの大小白足袋中貫のお草履両手を付て長尾權四郎頭を上げ　權「當家の年寄役長尾權四郎お出迎ひを仕りますお通り下さる樣にと通らして使者の間へ通らせました使者の間といふは當家の陪臣の使者の通る處で主殿頭何で斯んな取扱ひをいたすと一向合点が參らん勃然といたして　主「權四郎身不肖おれども我は將軍家の御上使使者の間へ通すが當家の先例が承たまは

ら時に權四郎頭を上げ當家はお使者の間もございまするか夫れは御老中樣の御使者の御出になります御老中樣あれば先例の通り取り計ひますか若年老の御上使は今日が初めてゝございまするに依て如何いたして宜しか當惑仕まつりましたに依つて斯く取り計ひましたでございます若年寄を以て御老中とは同じ樣に取扱ふ譯には往きません此儀御賢察願ひます憚りながら當家は足利十三代の將軍義輝公よりして輝の一字を賜り輝虎入道謙信朱の柄の傘綱代の乘物菊桐の御紋文の裏白代々殿上にて元服いたし御諱の一字を賜はる家でございます御老中あれば御老中の取扱ひ若年寄りの取り扱ひを御老中通りに仕まつりましては當家の家格は拘はります一ッは先例ともなれば家の瑕瑾と相成り依つて斯くは取計ひましたのでございます此段御思慮を願ひます其文の裏白といふは何だといふと將軍家よりお手紙が參る裏白と申し唱へる足利の家と其理へ返事を書いてやるのを文の裏白と申し唱へる足利の家に玉威が寝ろへ三條大橋より十番高乘の君の御息所のお樣りが見たといふ位御塀か鎮廢をいたした其節に上杉より米を三千俵毛利より二千俵御所へ差上げて夫で御垣を一寸補あつたッテ見れは上杉は御家拵だ何とも主殿も云ひ樣かない依つて歸つて沙汰をいたすと云ふてスッと立上つてお歸りにありましたで將軍家に其事を告げて議言すると將軍家はお怒り遊ばすかと思ひの外ニコ〳〵お笑ひあすつて　將ア左樣か」と仰しやつた夫れじやアどうも聞言た甲斐かないといふもの翌日に相成つて前申上た通り安藤右京進が御上使を相務めて上杉家では大屋敷よんで先例の通り御馳走をいたして御上使へ黄金三枚差上げる御上使は夫々手當をいたしてお歸りになる其處て翌日上杉の家來長尾權四郎から田沼の家へ催促にやつた過日御目通の節何れ沙汰をいたすと仰しやいましたが何の御沙汰もございません御用御多忙に就て當方より使ひを以て窺ひ奉まつる仕方がない追て沙汰

をいたす又四五日經をて又田沼の方へ使ひを遣た追て沙汰をいたすとの事あれども何の御沙汰もございませんが御用御繁多に就いて早く御沙汰を窺ひたいと云ひなした追て御沙汰をいたす〳〵と遂々追て〳〵追挑ての儘におつて了ひましたサア田沼は殘念どうかして此の仕返へすを仕たいか第一大奥へお使物をいたし大奥へ取入つて御老中となり一万石新田開發の功を以て三万石となつたから賀に飛鳥を落すの勢ひ搗ゝて加へて悍山城守といふ者の若年老となつて御親子に御老若をお勤めになつたのは田沼様贈りださうでお父さんは頗るお手柄があらつしやいますけれどもお伸れお之れといふ功がおいが親のお影で大きな顔をして居らつしやる夫を其若年寄の面々が憎くがつて何か一ッ田沼に恥を與へてやりたいものと御同勤の面々考へて或る日の事で若年寄の米倉丹後守太田備中守酒井大和守狩野遠江守此お四人が申し合せて偖米倉殿が發言をして

米「今日田沼へ恥を與へてやらうといふには何でも我々が先祖の勤功話を發て始め何處の合戰に功名をしたといふ話を始めて一番終ひに田沼へ對して御先祖の功名話を承たまはりたいと申し入れる田沼は昨日の成上り大名殊に之といふ功名話がおいお父さんは御老中だがお祖父様は紀州日高郡御坊村の百姓全体鎧兜持ておければ系圖もなく好い親類もなく先祖の御勤功話といつたら赤面をするだらう夫が宜からうさうしてやらうと申し合せて居る處へ夫れと知らねば田沼山城守登城いたし田「お早き御出仕でございます米「當日快晴恐悦に存じます〳〵と皆々挨拶をした時に米倉殿が米「扨て先日から窺ひたいと存じて居ましたが太田家の御先祖の御勤功話といふを窺いたいものでございます豫て申し合せてあるのでございますから

○「左様〳〵どうか太田家御先祖の御勤功を承たまはりたいと云ふと太田備中守太「左様で那に之まで申して申す事もございませんが此方の先祖と申するは太田持

貫入道道灌といふと米倉丹後守　米「太田侍従入道々灌殿は當西丸の縄張りをいたした太田道灌先生は道灌山といふ地名が殘りて居る又高田の馬場の先に山吹の里といふのがある一日道灌先生お山狩りの節俄雨に逢つて百姓の家へ御立寄りにあつて雨具を借せといふと其家の娘が山吹の花を出した失礼ながら歌道不案内にして之が分らん古歌に「七重八重花は吹けども山吹の實の一ツだになきぞかなしき」雨具のないといふ事を山吹の花を以て答へた夫れが道灌先生其時分は和歌は分らなかつたが後に歌道を御修業遊ばしてお歌の名人とあつて夫から高田の馬場の先き に山吹の里といふのがある成る程道灌さ入りました好い御先祖で太田備中守といふのは夫れは子供も能く存じて居る　太「恐れ入りました山吹のお話と夫れから大坂合戦の時太田新六郎と申して神君のお供をいたして田陣いたしました住吉合戦の砲り鐵砲を以て真田勇士の家來青山小助といふものを討取

りました人參男の新六郎といふ綽名を取りました　米「人參男をはどういふ訳なのでございます　太「夫れは何にでも秘が宜しいといふ處を以て人參男といふ綽名を取りました夫れより代々太田備中と云ひます　米「夫れは好いお話を承りましたとお次ぎの事でありますから狩野の御先祖の御勲功話を承はりたいといふ彼の狩野遠江守　狩「左様で私しの先祖と申しまするものは頼朝に御へまして蛭ケ小島へ流され文覺の院宣を給はり御挙兵の時山木判官之隆を討取つた其後石橋山の合戦に源氏方の者悉く討死をたして敗軍となつた頼朝公主従七人杯木の穴に匿れて居らるゝ處へ梶原の爲めに助かり主従七人上總へ落ちやうといふ時に又も大庭の兄弟の爲めに追掛けられアワヤ頼朝主従七人の内に狩野六郎狩野七郎後殿をいたして大庭の同勢を喰ひ止めて其時の功に依て頼朝公より御感狀を給はりましたが今以て家に傳てあります之が聊か物者の家の功名話でございます　米「成程狩野

氏の先祖勳功話好い時に承まはりました夫れに就ては御慰順でございまするに依つて酒井家のお話しを承まはりたい其時に酒井大和守　酒「されば拙者の先祖のお話と云へば德川の四天王の一人酒井左衛門の尉忠次殿の分家でございます秀吉公の御前にて本多平八郎忠勝酒井五平太安政の両人が三河踊りといふのを御覽に入れた其三河踊りといふは何だと云ふと赤裸体になつて踊つたので忠勝は若年の時より戰場高馬の中を往來をいたし身体に卯の毛で突た程の疵もなかつた酒井安政と聊かも疵のない本多忠勝が觀があつた傷のあつた酒井安政は八十三所といふ体にあつて御覽に入れた之も両家の自慢話で此方の先祖酒井は戰場高馬往來をいたして陣刀の柄へ手を掛けた事があいゝと見れば采配を執つて始終指揮いたして居たものだと見にます　米成程蜻蛉より酒井の酸漿の方が怖いといふ位其頃の名高き評判好い時に承はりました酒井識岐殿のお家でございいますかと皆々

感心をいたした時に皆々言葉を揃へて　皆々「米倉殿の先祖は武武田信玄の家臣矢張り米倉丹後守で信州の虛空藏山の城攻め時に敵方から矢丸雨霰の如くに飛び來たつて仕方が無から竹エラといふ者を新發明をいたして此矢丸を防いた甲陽軍鑑に之は出て居ります夫が聊か先祖の勳功話天正十年武田の家滅亡いたして御當家へはお抱へになりました　皆「成程自分〳〵の家に持ち傳へてゐながら誰殿かエ風いたしたのか一向に存じません扨ては竹胴は米倉殿の御工風おすつたのか實にとうも驚きます夫れに就て太田殿のお話より酒井殿のお話より田沼家のお話しを承たはりたいやうか御先祖の御勳功話をお聞せ下さる様にと四人の衆がズル〳〵と膝を進め來つた山城守は面白いから皆さんの話を聞て居たけれとも扨て自分の方へ廻はらうと思はなかつた何を是と云つてお話しをするお話はないから田「誠に失禮でございます、が俄かに眼痛難儀をいたします坊主坊

主とお坊主を呼んで「田沼に失禮でございますが一寸厠へ參りますアイタ〳〵」と腹に痛て苦いと云つて厠へ往つて了ふ其處で四人は山城守を雪隱攻めにして了つた明日參つたら又困らしてやらうと云つて翌日になると先づ山城守が參るのを待つて御先祖の勳功話を承まはりたいといふと藤兵衛と云つて厠へ往つて了ひ又翌日もさう云はれるから田沼山城守登城する事が出來ないから病氣と披露して登城しないでゐる又さんにも其お話をするからも藤にとうも忌々しい譯であるけれども仕方ないから病氣と云ふて登城をしない何か好い工風があるまいかと云ふと山城守の妹にお高と云つて十九歳になる娘がある其お高を高取の家柄の大名にとうか縁付たいさうして婿舅の約を結べば左樣々々賣買もしまいから何處へやつたらんだ二万石や三万石の大名では諂らないと云つてもウ二十萬になつて其時分大名談を極めないと云ふ者はないと段々調べて見ると時の御大老の内藤帯刀頭の

伜に玄蕃頭といふものがある二十三歳になつて未だ定まる縁邊がないといふ事を聞たに依つて其處で帯刀頭の伜玄蕃頭の處へ娘を縁付けやう帯刀頭の御舅になつたらさう〳〵は同藤兵衛が賣も仕まいと云つてやうも高が違ひ家柄も違う此方から貰つて呉れと云ふ譯にも往かないからこれは上樣へ御媒妁を願つて遣はさうと「年去田沼家には系圖といふものがなく又血の附いた鎧兜と云ふ物がおざひません依ひて大功のあつた良ひ親類を拵らへやうと考がえて居りましたが伜山城守の妹に十九になるおさんと云ふ者がある其おさんを何れへか家柄の所へ縁附けやうとしたが二万石や三万石の大名あれば貰ひ人があるけれども失では諂らないひどうか高取りで家柄の所へやりたいと考がへた所ろがどうも大名で二十代になつて縁邊の定まらないひと云ふは一人もおひ大概昔は藤の上から許嫁となつて親類同意で取極つて居る今は然んな事はないひけれども子供の時に縁組が好ひと云つて

許嫁をして其のお銀さまが年頃になつて悪疱瘡に取り附れて黒菊石になつたなどと云ふがありましたが此ういふのは嘘に賭らない段々田沼親子は其の縁邊を尋ねて居りますと茲に御大老井伊掃部頭の幹玄番頭といへるもの今年二十三才におつて未だ定まる縁邊がないといふ事を聞て夫では掃部頭幹玄番頭へ遣わさうといつた所で此方は些か三万石先方は三十五万石高も違へば家柄も違ふ私の娘を貰つて下さいといつて鉄面皮く行く譯にも往かいどうしやうと考へたが一ッ上様へ御媒妁を願をう將軍家より貰へといふ命令があつたなら掃部頭忌とは云はれまい然うしやうと一日主殿頭登城をして將軍の御前体へ罷り出で種々お話を申上る中にあつと溜息を一ッ吐きた溜息といへるものは宜い時を出る譯のものでない座して居やうとも歩行て居やうとも何万何千何百何十息を吐くといふ數は極つて居る夫を溜めて吐くかちには身体に滞はるがあるに相違ない此溜息欠伸放屁伸

身などといふものは都て失禮のものだ何も彼も御承知の上様あれば此様子を見て將「主殿其方只今溜息をいたしたな悴山城は若年寄其方は老中常に心配はあるじやろが溜息をするは何か政治向きに關する事で心配の件でもあるか　主「鍼に恐れ入りました　た實は政治外の事にて少しく心配がございまして失禮と知りつゝ思はず溜息を吐きまして茲はた恐れ入ります　將「ウーム政治外の事で心配とは何やうな事だ　主「左様なれば申上ますが私くしに娘が一人ございます名をまんといひ當年十九才に相成ります將「ウム」主「武藝遊藝も相當に仕込み置きましてムいますか御案内の通り父千左衛門は紀州御坊村の百姓にて別段由緒もございませんし又血の附ひたる鎧兜もあし成り上り大名出來上り大名と諸侯方輕蔑まして嫁に貰つて呉れる者もございません如何にも不便と存じ其の娘の事を思ひ出して嘆息をいたしました　將「然うか仮令先は何であらうとも當時役に立てばこそ此方は老中悴

は若年寄りを勤め居るのである以前の事を略じて貰はんといふ事はあい早速予が媒妁をして遣はす何れにか是れといふ心當りがあるか主殿頭どのたと思ひましたから　主「誠に有難う存じます　とうぞ御大老勤役仕つる非伊掃部頭の悴玄蕃頭今年二十三才に相成り定まる縁邊がございませんよつて是へ遣はしたう存じますが流も遣ひ家扶も遣ひまするゆゑ先方にても多くは不承知を申すでございませう　將「ウム宜しい仮令何と申しても予が媒介いたすのであるによつて掃部頭否やは申すまい心配いたすな　主「何分願いまする」と言こんで主殿頭は立ち歸る翌日の事で掃部頭登城をいたし別に御用もおく御話をして被爲入る中に主殿頭の娘を悴の嫁に貰へといはうとしたが餘りといへば身分が違ひ過るから流石は上様も言ひ出し兼れて居たが否應のないように承知をさせやうと思召したから　將「掃部其方當年何才になる

第四席

將「どうも五十六才では若い一寸見ると四十二才にしら見にん掃部様も一升買ひませうといふ譯に行かないから　掃「有難き仕合せに存じます　將「貴方の紋所はどうも粋な物だ井桁に橘といふは珍らしい掘の内の親類のやうぢや　掃「有難う存じます　將「どうも掃部の屋敷は地色が好いと申す事ぢや　掃「左様でございます下町を見晴らしまして誠に結構の地所を頂戴いたし有難い事に心得ます種々御褒めにあるから掃部殿は御用金でも申附りはしないかと思つて居ると　將「掃部其方には當年二十才になる玄蕃といふ悴があるが未だ定まる縁邊もないか　掃「御意にございます未だ是と申す定まりましたる縁邊もございません　將「然らば予が媒妁いたして取らするに依て嫁を貰ふが宜い　掃「誠にを

うも有難う存じます上の御媒妁とあれば別して喜ばしう事を
ございます就ては誰殿の御息女でございますかと問はれて將軍
も流石に田沼の娘だとは言い憎いに依て　將「當年十九才におつて悉おとく標緻が美く天人が天降つたかと思ふ位か見ぬ昔の小野小町も斯くばかりはあるまじく花も羞ぢ月も閉るといふはせの美人であるぞ　掃「誠に難有き仕合せに存じますが何人の娘でございます　將「第一近藤が出來る琴鼓弓三味線は申すに及ばず唐土の音樂も心得鼓縫は勿論の事韻書習字武藝は一刀流の劍術を仕ひ大坪流の馬に乘り武術流の鐵砲が出來るどうも大した者だと思つて掃部樣も喜ぶべし　掃「シテ何人の娘でございますか　將「イヤ其は其の主殿の娘だ　掃「ヘエ松平主殿でございますか　將「イヤ松平ではない田沼主殿守の娘でまんと申し當年十九才に相成ると聞て掃部樣も驚ろいたが其の場で忌だといふ譯に行かないから　掃「有難い仕合せに存じます　將「よもや否やはあるまい早く立歸つて玄蕃に其趣むきを申て吉日を撰んで結納取替せをいたせ掃部頭も迷惑を致したが　掃「委細畏まりましたと云つて直ぐに屋敷へ立歸り何とか悔とも相談をしてお斷はり申さうと考へ早速悔玄蕃を呼んで　掃「扨玄蕃大變お事になつた　玄「何事か出來いたしましたか　掃「今日上樣斯う〳〵いふ仰せである夫は有難き仕合せにございますと受けをいたして何者の娘でございますかと承はつて見ると田沼主殿の娘だ十九になり容貌も善く藝も出來るといふ事であるがどうしたものであらう一旦有難き仕合にございますとお受けをいたしたに依つて即座にお斷はり申す譯にも往かず高々其方に相談をした上でと心得て立歸つて來たのだ是れを聞いて玄蕃は色を變へて　玄「勿論是れはお斷はり下さいまし　掃「斷はるに就ては何とか理由を附けなければならんが何といつてお斷はり申したものであらうか　玄「どうも私しは何とも申し上げられません強て主殿の娘を貰へと仰せ

られゝば私くしは切腹を仕まつります縁談の取極めといふものは親兄弟の自由にならんものでござるから私くしの一存には參りませんゆゑ伴に相談の上御挨拶をいたすと仰しやつて下すつても然るべきかと存じます夫れを私くしに何のお點しもなくお受けに及んで今におつて伴どうしやうと仰せられるは些と道が違うかと存じます今はどういふ身分になつて居らうとも百姓から成上つた田沼主殿の娘を貰ひましては當家に瑕が附きますぞ然るべくお斷はりを願ひますと玄蕃頭殿を立つてポン〳〵やつけたから掃部頭も大きに當惑をして據どころなく夫れより家來を呼んで相談をすると　家「是れは若殿様の仰せられるのは御尤ともでございます併し故ふくお斷はり申し上げるといふも如何の事ゆゑ御病氣と仰しやるより外仕方がございませんか假に大病といつてお斷はり相成つたれば宜しうございませう　掃「昨日は有難き仕合せ夫れではさうしやうと翌日登城をして　掃「其際お受けをいたしましたが歸城をいたして玄蕃へ其の趣むきを申しましたる處當人も至極喜こび居りましたるが今朝に至りまして俄かに發熱仕まつりまして九死一生殆んど存命の程も覚束なきほどにございますするに依つて兎も角一旦お斷はり下さるやうに」と申し上げると上様も兼てそんな事もあるだらうと思召して居た處ゆゑ　將「左様か然らば其の趣むきを主殿へ申すであらうと夫れより主殿頭をお招きになつて云々御々と　主「委細承知いたしましたといつたやうなもの　主殿も　の仰せに主殿　心中大きに立腹をして直ぐに神田橋の屋敷へ立歸つて來たが全たく是は怪病に相違ない十ッ病氣の眞偽のほどを探つて呉れやうと瀧川通仙院いとふ醫者を招いて　主「通仙院外ではないが斯う〳〵いふ次第病氣の眞偽のほどを確かめて貰いたい若し留病あれば捨置く譯に往かん尤とも此方から參つたと云つては往かん上様の御掟に依つてお見舞に罷り出たといふ事にして參つ

て呉れるやうに通仙院も是れは迷惑な事を吩咐かつたと思つたが當時時めく田沼主殿の吩咐であるから　通「委細承知いたしまし　通「上様御掟に依つて病氣御見したと播部頭屋敷へ罷り越して　掃部頭家來は大きに驚ろきよる御ひに罷り出でましたと聞いて掃部頭家來は大きに驚ろきよるやお見舞の醫者などか來る氣支いはないと思つて居る處へ突然の事ゆゑ狼狽したのも尤ども若殿様は剣術を仕つて在つしやるとうも九死一生の病人が劔術を仕つて居る譯に往かないからソコで一人道場へ參りまして　家「若様大變でございます　玄「何だ家「只今是れ〳〵で　玄「ウン此の方の病氣は癒つたと斷はつて呉れ家「御病氣が癒つたと云へば御緩談のお受けをしなければはなりません　玄「夫れは困つたなどうしたら宜からう　家「兎に角九死一生の病人だといつたのでございますからお忌でもお床の内に通入つて御病人の風をして在つしつたか宜しうムいます　玄「馬鹿をいへ斯んな達者の者に病人の真似が出來るものか　家「うんな

事を云つてもどうも仕方がございませんどうか直ぐにお支度をおすつて鉢巻でもしてお床の内に迂鳴つてお出なさいまし　玄「予はうんお馬鹿氣た事は出來ない宜いから其の通仙院と申す者を待たして置け俺が行つて懲ろかしてやらうといふので家來も據どころなく通仙院を一間の内へ通して置きまする處へ玄番頭後ろ鉢巻をして槍を掻込みズカ〳〵と夫れへ通入つて參りまして　玄「ヤイ通仙院其方玄番病氣見舞いとして罷り越した趣きである予は此の通りピン〳〵いたして居る此位直ぐ立歸れば好しマゴ〳〵して居れば一槍に刺し殺すかどうだと真ッ先へ鎗を突附けられたから通仙院大いに驚ろいて　通「ヘヽッさういたしまして早速お暇仕まつりますとうぞお助けなすつて下さいまし　玄「然らば早々立歸れ　通「委細承知致しましたと瀧川通仙院真番になつて玄關へ飛出し這う〳〵の体で田沼の屋敷へ立歸つて參りますると　主「どうであつた玄番の病氣は　通「イヤどうも驚ろ

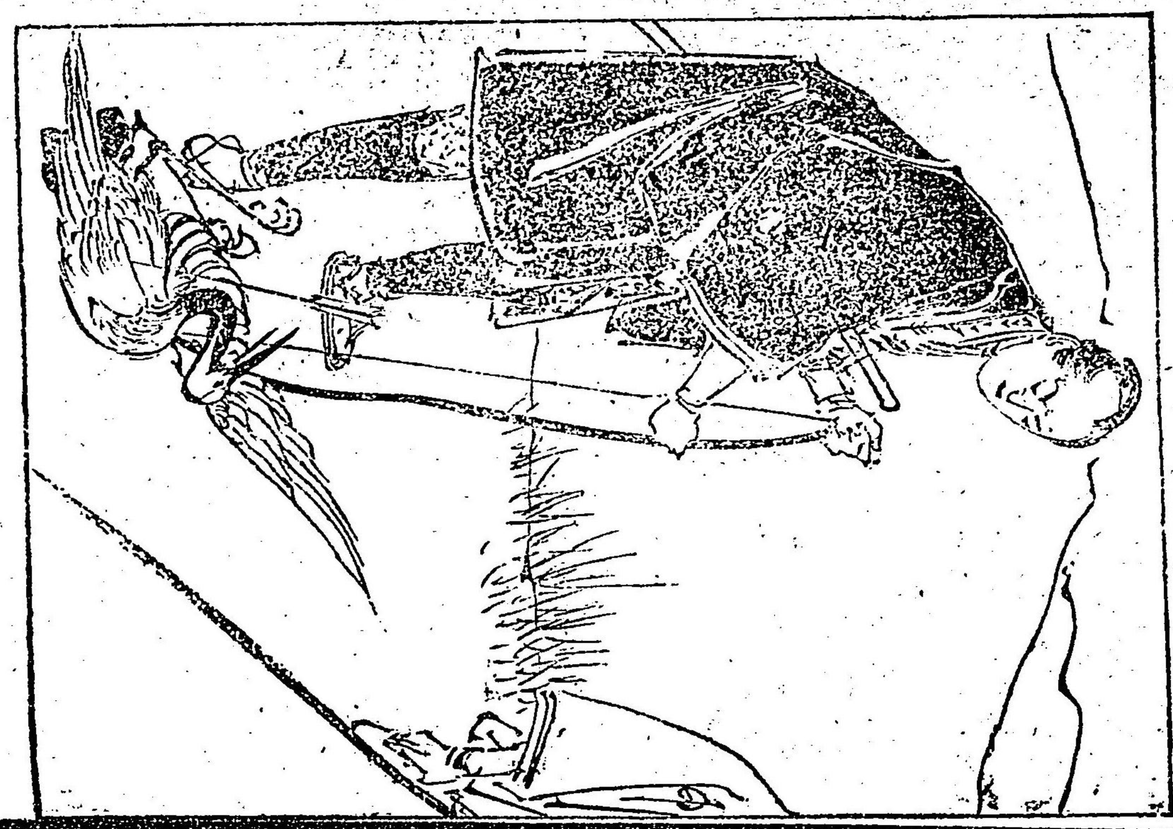
きました寶は玄蕃頭は病氣といふは發狂でございまして是れ斯ういふ始末でございました

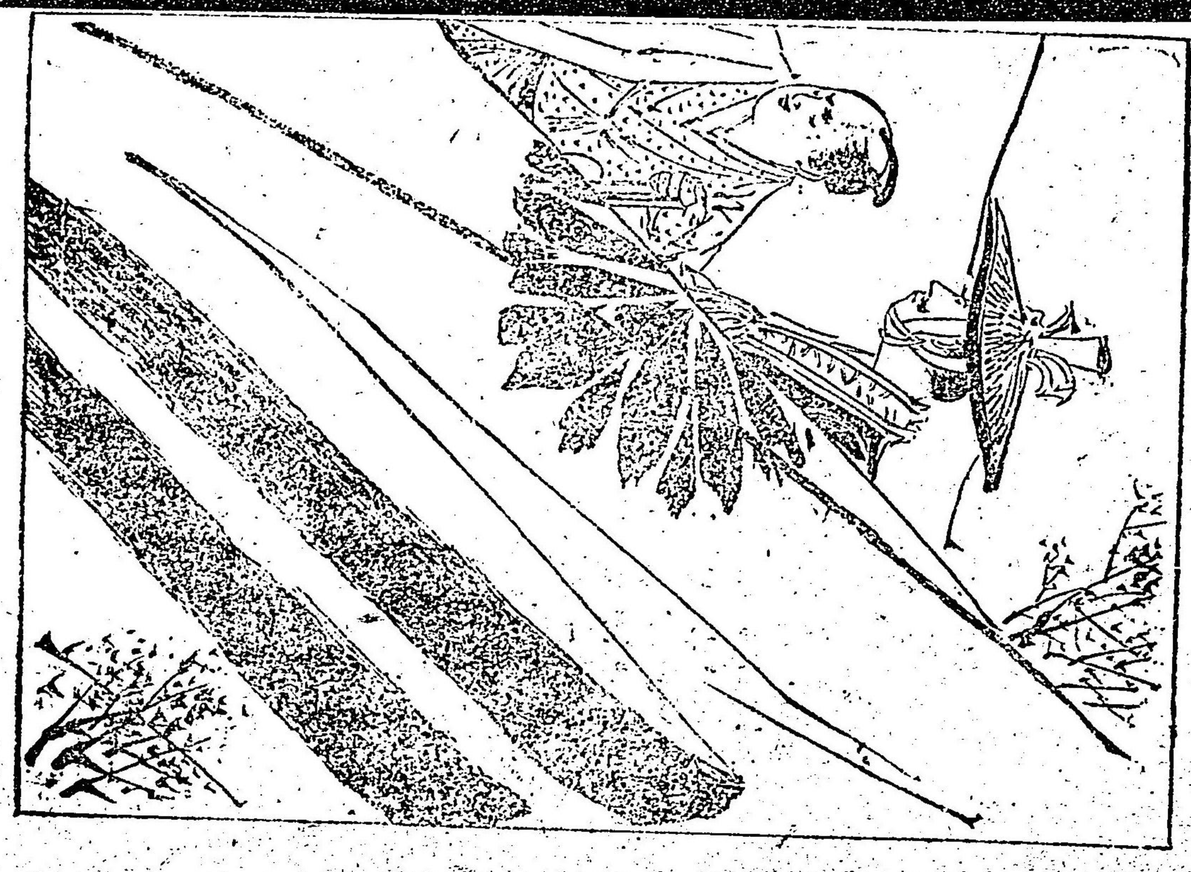
主ッンさうか夫れは宜い事をいたした妹一人を狂人の處へ嫁に遣つては取返しが附かん離はられて幸はいであつたといつて北條沙汰止みに成りました

モッ宜い自分だと思ひましたるから三十日ばかり經つて玄蕃頭病氣全快のお屆けをいたす此の田沼主殿の娘が十代樣のお手が附いてお持ち申し上げたのが十一代將軍でございます先づ結構の事はソコで沙汰止みになつたがどうも家の系圖といふ物がおければ高事に就けて人の輕蔑を受け殘念であるといふのでソコで主殿頭が惡策を案じ出して佐野家の系圖を奈ひ終に殿中及傷の一條に相成ります

第五席

何分にも田沼の肩身が狹いからどうか系圖を拵らへたいと段々田沼と云ふ人を尋ね勇者でも智者でも田沼と云ふ人があつたらば夫を自分の先祖に仕やうと云ふので尋ねたが田代の田の字を取て管沼の沼と云ふ字を取て付た田沼と云ふ名字であるからとも田沼と云ふ軍人が目附からない段々書物を調べると人皇九十五代後醍醐天皇の笠置御籠城の時に鎌倉より向つた大佛陸奥守と云ふ者の手に田沼刑部元澄と云ふ剛い人があつて此笠置にて朝敵の汚名を受たが討死をいたした北田沼刑部と云ふのがあるが北子孫と云ふのが何處に居るか一向に分らないから此人を先祖に仕やうと段々調べて見ると野州の佐野の在に田沼と云ふ處がある此處に田沼稲荷と云ふのがある只今佐野の停車場から下りて馬車に乘て往くと田沼と云ふ處に白狐彈正殿稲荷としてある鉄の鳥居はあるし立派の稲荷樣御神体が兜が納めてある夫を北田沼主殿頭が飛地で自分の領分にして了つて先祖主佐野善左衛門と云ふ人を三州の白須賀と云ふ處へ領地を移した之が佐野善左衛門の一ッの遺恨となつた御老中若年寄の時分の





紹荷だに依て今以て立派な田沼邢部元澄笠置にて討死をして其子孫が民間に降つて八代の上様のお見出しに預つて田沼善左衛門田沼郡助事田沼主殿頭其伴組助事山城守と系圖をスツパリ拾らへた夫ゆえ貴郎の先祖は何誰でございますと云つても明かれて恥かしき事はおい斯々だと云つて自慢に其話しをする其田沼の屋敷へ始終出入りをして居る佐野亀五郎と云ふものがあるが佐野善左衛門の分家で一口ふ酒のお相手をして居る時に山城守殿が　山時に亀五郎其方私の先祖と云ふ者を存じて居るかどうじや亀五郎は貴郎の先祖は紀州の百姓で斯々云ふ者と云つても極りが悪かから　亀一向存じません　山ソンなら話して聞せる人丸十五代後醍醐天皇笠置御籠城の時に討手の大將大佛陸奥守の旗元にて田沼刑部と云ふ者が此方の先祖だ　さうすると亀五郎が首を捻つて考へて居た何を考へて居るのか　亀御線と申もの は不思議な者でございます私共の先祖と申しますものは後醍醐

天皇笠置御籠城の時に佐野近江守と申します、其近江守の家來に田沼刑部と云ふ者がございますと云ふ譯か其時の繃台に依て大佛陸奥守の組下に相成りなすつた御當家の先祖は私共の先祖の家來で　山さうか語らん者に話しをしたと思つたが輕いものゝ系圖等びと云ふて取るに足らない　山何か証據でもあるのか亀夫は本家佐野善左衛門方に書たものがございます系圖遺書と云ふものを御覽にありますれば相分ります　山持て來て見せると云ふと亀五郎見まりましたと番町の御厩谷の佐野の屋敷へ亀五郎が來て　亀サテ斯々云ふ譯であります書を拜借をいたし度うございます善左衛門殿は先祖代々の領地田沼を取れて三州白須賀に領地替をされたを殘念に思つて入らつしやるに依つて　佐イヤ貸せない大切な系圖遺書であるから殿様へ貸す譯にはいかない遠て見たいと云ふならば此方へお出でおさいと申せ　亀ヘイ畏まりましたと云つたは云つたけれ

も山城守に對して此方へ來て御覽なさいと云ふ譯に往かない
から田沼の屋敷へ來ては「龜」深く收ひ只今見當りません
當り次第御覽に入れます　山「夫は嘘だ無ければならん大切の系
圖を深く收つた見當らんと云ふのは時に取ての指らひ事に相違
ないスワ何か騒動と云ふ時分には第一番に持出すのは家の系圖だ
夫は北方が指らへ事と云ふものだ貸せなければ貸せないで宜し
い武士と云ふものは嘘を吐かんものだ其方は嘘を吐くに依つ
て以來北方の云ふ事は眞事とは思はんに依つて左樣心得ろ　「龜」
イエ全くで……　山「全くあら持て來て見せろ」斯う云はれるから
サア本家の佐野善左衛門方へも往かず何とかく田沼の屋敷へも
出入りません扨天明三年の六月中旬の事で十代の家治と云ふ將
軍がお書物をおさるに就て龜五郎に盤摺りの役を仰せ付けられ
ましたからお樣側に於て龜五郎盤を摺つて居た盤と云ふのは勿
論唐盤で硯石と云ふのは朝鮮征伐の時分取りをいたしたるもの

にて仙臺忠宗と云ふ者より將軍家へ獻上をいたした村雨と云ふ
お硯石平生硯の中に濕りがあるに依つて村雨と云ふださうで龜
五郎が今盤を摺り始めるとポツ〳〵と降り出した雨が何時し
か車軸を流す樣な强雨となつた夏の雨だに依つて心持が好いと
云つて居る内から〳〵と雷が劇しくあつて此龜五郎と云ふ人は
自体雷が嫌いだ雷と云ふものはエレキが多い者は驚かないがエ
レキの少ない人が雷を至つて恐れる者で其お硯石を持て此方へ
逃込んで來やうとする途端にから〳〵と庭の樋の水へドー
ンと落雷いたすへッと驚いた龜五郎お硯石を生憎お闕の上に落
した雷は遠くあつて了ひ龜五郎氣が付て見るとお硯石が眞二つ
にあつた盤も三ッにあつて飛んで居る龜五郎は驚いたサア大變
だ金で買う事の出來ない村雨と云ふお硯石二つにいたして何と
いたしたものであらうと考へて居る顏も手も眞黑になつて居る
處へお上りにあつたのは田沼山城守上樣の御前へ出て　山「只今

落雷仕まつりましたか併し御安体にて恐悦に存ぜられます　上ヶ山城か其方も安体で宜しかつた庭のアノ通り樫の木へ落ちて樫を二つに裂いて了つた併し殿内には何事もあい安あだに伏つて安心いたせ其方は屋敷へ戻つたか　山丁度門前まで参りました處本丸へ落雷いたしたと云ふ事で早速駆付て参りました處何事もかく誠に恐悦でございます　上ヶ丶さうか劇しい物の音で余も一時驚いた龜五郎を之へ呼べハッと答へて山城守　山龜五郎召します龜五郎お召しだと來て見ると龜五郎は眞黒になつて割れた硯石を前に置て頻りに心配をして居る　山龜五郎どうしたと云ふ龜五郎ブル〳〵顫へて　龜只今斯ら云ふ醜てございます切腹をいたしたものでございます　山さいませふか差扣へて居て宜しうございませふか思案をいたして居る處でございます　山夫はどうも飛んだ事をいたした併し短氣お事をいたしてはあらん待て居れ余が宜しく御前体を取なしてやる」と山城守が又御前へ出て

山申し上げます只今龜五郎をお召してございますからお樣側へ往て見ますると龜五郎が恐を揺つて居りますと只今の落雷の途端にお硯石を真二ッに響きで割りましてございますと當人心配をいたして切腹をいたさうか差扣へて宜しいかと其處に扣へて居りましたが全く龜五郎がいたした醜でございませんと雷が落ちましたる其時の響きに打割れましたのでございます寛大の思召しを持ちまして龜五郎をお免し下し置かれます樣願ひます　上さうか硯位わは割れるであらう那の通り樫でさへ引裂いた位であるに依て其位の事はあつたらう決して心配には及ばんと龜五郎へ申せ　山石り難き仕合せでございます人と云ふものは悧巧に生れたいものでお國の上に落したと云へば龜五郎が割たんだ同じ割つたんでも雷の爲めに割つたと云へば雷は咎める事が山來ない幾ら將軍でも雷は仕やうがあいから遂々雷の成にして了つた其處で龜五郎に向つて山城守が斯々申し上て

固たに依て今度は口の達はんやうにと云はれて龜五郎は大に喜び　龜明日龜五郎お礼に上りますと云ふと山城守　山應も明盤と云ふ事がある朋輩の爲めに善く計らつたのに其禮には及ばぬ左樣心得て居る樣に　龜有り難き仕合せでございます涙を流して龜五郎は喜び躁生いたした心地にて直ぐに翌日になのて最も立派の品物を調へて山城守の屋敷へ參りまして　龜昨日はお計ひを以て助かりまして有り難き仕合せ是は聊さか御禮の印しでございます何卒御受納を願ひたうございます　山ヤ其禮はに及ばん夫程其方が辱じけないと思ふなれば孫れて頼んで置た其方の系圖書を持て來て見せてくれ　龜委細承まりましたと夫から本家の佐野善左衛門方に往つて斯々云ふ譯であるからどうか系圖遺書を暫借いたしたいと願んだ義理の二字と云ふものは飲けないもので分家の龜五郎をお助け上すつたは有り難いが系圖遺書はお貸し申す譯にはならんと云つては斷られませんから

佐夫では仕方がないに依つて三日とお約束をいたしてお貸し申さう四日目には受取つて此方へ持て參つて返せ　龜長とまりまして其處で三日と約束をして系圖遺書を借りて田沼の屋敷へ持て來て三日と云ふ約束をして貸しました山城守は家來に吩咐て其系圖を書取るべき處を殘らず書取つて了ひ返すべき其系圖書を火に燒て焼て了つた大膽な事をして了つたもので夫れから三日經たに依つて龜五郎が催促に往くとモウ三日貸せと云ふ又三日經つて往くと御用繁多でツイ拝見を仕なかつたからモウ三日間貸してくれ又三日往て經くと半ば拝見をいたしたがマダ半ば殘つて居るに依て又三日と仰つしやつて六月七月八月九月と四月の間返さないソコで善左衛門殿がさう〳〵　龜五郎に任かして置く譯にはいかないから私が往かうと二度往つたが二度共に逢ひがなかつた三度目に田沼の屋敷へ來ると　龜お拙へなさいと一室の内に通しお目通り仰せ付られますから此方へと云

ふ案内に通れられて山城守の居間へ通る佐野善左衛門は五百石新御番を勤役をして居る其善左衛門の頭と云ふ者は蜷川相摸守其蜷川相摸守の支配頭と云ふのが若年寄の田沼山城守だから山城守の前へ出ては善左衛門中々頭が上らない此方へ通て見ると山城守殿は將几に腰を掛け本書の紙を下に敷いて其上に二本の足をヒタリと載せて彼らに御家來三人三里の灸を点て居る善左衛門は眼の中では我も天下の旗本お目通り仰せ付られるのは宜しいけれども將几に掛つて本書の紙へ足を載せて家來に灸を点へさせて挨拶すると云ふのは失禮千萬の事斯うも增長する かと思んで居りまする彼らより一人が ○「申し上げます佐野善左衛門罷り出でましてございます 山「さうか自分が山城守である何か善左衛門願ひ筋でもあつて參つたか何分の道上せてならんに依て道上引下げの灸を点へて居るから夫にて申せ 善「餘の儀で はおざいませんが去ぬる六月分家龜五郎より系圖並書を御用立申し度々御催促いたしましたる處今以て御返済もありませんが御用済みに相成たるれば御返し下さる樣今日御催促に罷り出でしたでございます 山「さうか夫は善左衛門迷ひだらう田沼の家には田沼の系圖を持て居る佐野の系圖を此方に借るべき道理はない私は知らん善左衛門喫驚した 善「知らんと仰せらるゝお

れば申し上げます……山「默まれ知らんと申せば知らん多くは其方發狂いたしたに違ひあるまい善左衛門と云ふ者を下げろと仰つしやつた 家「ふ歸んあさいお戻りなさい三人の者が善左衛門を抱へ出して了つた其處で善左衛門は飛び掛つて殺してくれやうと思つたが山城守へ刀傷をするは一大事だから屋敷へ歸つて掛合しやうと無念を堪へて歸宅し夫より病氣と云つて出仕しないけれども山城が惡いと云つてウヽ〳〵病氣と云つて閉籠つて居る處に往かない全快届げを爲して出仕をいたした時しも 稲月二十五日小松川へ十代の飛軍家治公お鷹お成り徳川樣の時

分には第一番に重いお成りと云ふのがお鶴お成りで上野の芝へ御参詣と云ふ時には御先祖のお墓参りに入らつしやるに依つて御目附を預り申して居る殿様が何れも還御の時もお成りの時も両手を仕てお演御殿一寸お遊びにでも入らつしやる時は片道は殿様片道は陪臣のお番頭と云ふ者で事が済むお鶴お成りと唱へるのは夫将軍の職をお勤めにおるお方が十善万乗の君に献上しやうと云ふお鶴を捕りに入らつしやるに依つて一番重い其處でお成りの時に殿様が下座をして居るもので好く第八衆が仰つしやる其鶴を鷹が捕り損くおると隼を加勢に出すと云ふが之は嘘で鶴を捕る鷹をお鷹と申すので鷹を捕るのを隼が鶴と云ひ雲雀を捕るのを隼と云ふ持場々々が極つて加勢に出ると云ふ事はお将軍様のお拳に据はる鷹は二度鶴を捕へ鷹に覚にのあるので紫の紐が附てあります上様のお拳に据るのを一度鷹を捕つたのは新い紐を足に付けるのを見ると云ふと紫と云ふものは重いも

ので鶴を捕のは捕ると云はないで鷹を合はせると云ふて向ふに鶴が来るとハッと夫に鷹を合せると鷹が片方の手に捕まへて片方の手には充分に鶴の咽喉に掛けて落ちて来るとお側の者が御上意〳〵と云つて鶴を捕へ付ける第一番に捕へた物は銀一枚第二番に捕へたものに銀二枚三番目が三枚と捕へた者は御褒美が出る其處で鶴に引導を渡して鶴の腹を割いて中から生鷹を取りて鷹に褒美として喰はせる島に引導を渡すは鶴許も「人心畜む同生佛果」と云ふ引導を渡し夫から腹を合して切た處を縫つて了い其血を白紙で拭く之を鶴の血紙と云つて女中衆方の血の道の薬になる、夫は其長さ七尺の青竹に其鶴を結付て京都へ晝夜を分たず担いて往く捕ると第一番に御本丸の留守へ注進をする第二番に若年寄へ注進をして三番に大目附へ注進をして第四番目に其お鷹を預るお鷹匠の處へ注進をする將軍様のお拳で鶴を捕た と云ふと其鷹は御鷹居鷹となり何にも仕ない二間鷹の間があつ

て片方には柏の木を植えて片方には松を植えて御隠居慰になつて了うデ立派なものとなる十番万乗の陛下へ献上を仕やうと云ふ鶴は俗に鍋鶴と云ふので鶴には三通りありて丹頂真名鶴俗に鍋鶴と云ふのは本名朝鮮鶴と云ふ此お獵がなければ毎日〳〵出で居なければならない今年は鶴が捕れませんから御免を蒙むると云つて京都へ申上げる譯に往かないと溯と云ふ人の句に「麥主の涙をとばす鷹野かな」と云ふがあります麥主は迷惑千万なものだ其時田沼山城守もお供をいたして居る惣同勢五百八十人其日に限つてお獵がない時に上様將几に掛つて空を御覽あされて入らつしやつた處へ鴈が飛んで來たへの字と云ふ樣な格好になつて上樣之を御覽遊ばして　上之れ〳〵　鴈が來た那の鴈を射て落せ」と仰しやいました處が誰有つて一人射て落すものがない又　上「射て落せ」と仰つしやいました内に鴈が往て了つた連雀と唱へて上樣が弓矢を射て落す時には一同の面々我も〳〵と皆

々下から射て放す誰の矢が當て捕たんでも夫は將軍樣の捕た積りにして了う之を連雀と唱へるけれども上樣が射て落せと云ふに誰も出人がない少し御機嫌の惡い處へ又〳〵射損じあれば尚ほ御機嫌を損ふから誰も射て落すと云ふ人がないスルと　上「又〳〵鴈が一群來た十代の將軍家治の代になつて徳川の弓矢は衰へたと云はれるも殘念だ誰かある鴈を射て落せ落すものはないか此時に下手の方よりハッと答へて出たるものは番町御厩谷に於て五百石を頂戴いたす佐野善左衛門田沼山城守もお供の内にあれは幸ひ我弓勢の程を見せ付てくれやうと云ふ心得て弓矢を取てガッバと番へ立〳〵と滿月の如くに引き絞りヒョーフッと切て放てば誤たず一羽の鴈を射て落しました他の鴈は列を亂して逃走る尤も上樣に出す鴈と云ふものは肉肉へ疵を付けると云ふと献上にならない疵を付けない樣に羽を縫ふものだに依つて至つて六ケ敷鐵砲の方は當るのが當前とあつて居りますが弓の方は當らな

いるのが當時として有る日本武士を弓取りと云つて至極六ケ敷者だ雁が向ふの水田の中へ落ちたから上様は御機嫌を直して上「好ういたした善左衛門匆々雁を之へ持て善左衛門喜び弓を置いてお供の内から小腰を屈めて駆出で向ふの水田の中にあつてホチヤ〳〵苦しんで居る其の首を持て提さげてダク〳〵と水の垂るゝのを上様の御前へ持て出る　上「好ういたしたと仰つしやつた時に傍らに扣へたる山城守　山「善左衛門扣へろ　善「ハヲ山「空飛ぶ鳥を射て落すには二十六間先きへ射て落すが古術夫を上様の直ぐ御前へ射落して仕たり顔をいたすは何事である之は其方の功にはならぬ」とッイと立つて直ぐに善左衛門の持た其雁を取て後ろの水田の中へ夫をドブンと打込んで了ひ　山「恐れながら言上仕まつります彼は弓取の古術を知らんものでございます改日お成りに相成つてお宜しうございます此儘今日は還御相成りまする様」と申し上げると御機嫌が直つて居た處であるから上「左様か面白くない事だあア」と仰つしやつてお立ちになつた夫れ還御と云ふと一同還御〳〵と云つて五百八十人の同勢お供をいたして此處をお立になつた何とも云はず下俯向て涙を流して佐野善左衛門持たる弓を投捨て一刀の柄に手を掛けて　善己れ山城守直ニッにする」と云ひながら追駆げて往く　○「善左衛門暫らく待つた」と後ろから抱き止めたのは御同勢田川惣左衛門と云ふ人前へ廻はつて両手を廣げ待てと云つたのは萬年六三郎と云ふお方　六「暫らくお待ちなさい仕返しを今茲でいたさんと又傷いたさば上様のお御でであるゆゑ上様の御身の上に過まちあつてはならぬ傳右衛門と云ふお父上のある事をお忘れか當年六才にあつた善之助と云ふお子のある事をお忘れか暫らくお待ちなさいと云つて両人止めて父傳右衛門と云ひ伴善之助と云れて涙を流して善左衛門が下俯向いて居たが　善「宜しい拙者は病氣と申して之れより宜帰へるから跡の事は宜しくお取計し

を願ひます　六「宜しいお歸りなさい」と其處で善左衛門番町の屋敷へ立歸へり　善「お父さん只今歸へりました　父「大層早かつたが今日はお願があつたか　善「不願でございます病氣ではありませんが私しは病氣と申してお先へお暇を頂戴して歸りました　父「至極血色も惡いが病氣でないものを病氣といつて引取つて歸つたのだ　善「只今よう始めてお話しをいたしますが殘念で堪らせん去る六月田沼へ對して系圖を貸しましたが何時までも返さざるを以て催促に參りました處斯樣〳〵で今日又お成り先に於て斯樣來人の目前で上樣に弓取の古術を知らぬものと云はれ私しは其場で山城守に及傷いたす心得でございました處朋友に止められたが殘念で堪らないから山城へ及傷するの覺悟でございます何卒一生のお願を頂戴仕まつり度くございます五百石を投捨て命を捨てゝ事をいたし度ございますからお聞濟みを願ひたい

第六席

聞て居た父は　父「イヤ悴好く覺悟した尤とも千万物の見事な山城守を……併し淺野内匠頭殿吉良上野介に對して及傷をいたし梶川某し抱き止めたに依つて本望を遂げ赤石内藏之助と云ふ家來があつて其恥辱を雪いたに依つて宜しいがお前が及傷を仕ろくかつたら内藏之助となる家來があるまいモウ此善右衛門は老朽いたして何の役にも立たないから前後に心を配つて心氣を沈着け仕損じない樣になされよ　善「畏こまりました　父「夫に就て家來どもや妻子に迷惑を掛けない樣取計らへよ」と其處でいろ〳〵の名を付て下郎下男に暇を出し自分は病氣と云つて引いて居る淺草の門跡の寺中に神田山德本寺と云ふ御菩提所へお米を三十俵金子三十両を納め先祖の法事を爲し之にて善之助と云ふ悴はお父さんに御養育を願み聞たが之で宜しいが茲に只一

ッ差支へたのは連合を離縁しあげればならないどうか離縁を仕やうと思つて居たが操正しい奥様だから離縁をする廉がない漸々の事で翌年の三月節句奥方おやうと云ふ御方を離縁致しました偖て山城守を及傷するには病氣全快の届けをして再縁となる時に致さんとの心元より私しの遺恨に依つて及傷するのではなく天下の御爲めに及傷をいたします心得で山城の悪虐七ケ條と云ふものを認めて切り殺ろしたる屋敷へ一通切り殺したる個へ投文と称へて一通置くものであります夫はお役柄で善左衛門殿心得て居ります田沼は悪虚でございなすれば天下の爲めに及傷をいたしましたとの事を認めて夫を投文にいたすだが夫を田沼の勢ひが廣大なものだから若し同類の手へでも渡る時は夫を其振り潰されて終うも知れない、さうすれば只だ善左衛門が私しの遺恨の及傷となるやうか其の切り殺した時に犬死にならない様にいたしたいと云ふ處からお父さんに相談をしたお父さんの仰しやるには　傳「若し田沼の悪事七ケ條を途中で握り潰されたら誰殿に申し上げたらお前の志しが成り立たうと思ふ　善「左様皆時天下の事を正道にせんとするは水戸中納言治保卿此お方へ申し上げて置けば犬死にならないと存じます　傳「夫では治保卿に其田沼の悪事七ケ條を申し上げる事を工風いたしたら好からう　善「何者に申し付たものでございませうか夫に當惑いたしました　傳「夫れならお前の妹當時御本丸に御奉公をいたして居る秋を呼んで吩咐けあさい」と云ふと善左衛門殿が七人の子を産とも女に肌を免すなと云ふ諺ざ天下の一大事を女風情に頼む譯には往くまいと私しは存じます　傳「イヤ私しは娘を褒めるではないがお前に勝るとも劣りはしないお秋にお頼みなさい　善「夫れではさういたしませう夫にてお父さんが病氣と云つて御本丸から妹のお秋殿をお呼寄せになる當年積つて十九歳實に男勝りのお秋殿お父上の御病氣と聞て驚いてお下りなすつた見るとお父さんは

お達者で入らつしやると善左衛門殿が　善「扨お前を呼んだは別儀でない天下の一大事の儀をお前に頼みたいが天下の一大事であるに依つて心配でならぬと云んなら出來ないと云つてくれ女の事であるに依つて何も咎める事はない」と云ふとお秋殿が　秋「何事でござりまするか妾し風情に天下の一大事を仰せ付られますれば誠に身命を抛つて既度相勤めまする仰付られるやうに　善「夫れでは申し付ける實は此度斯々斯う〳〵云ふ譯若しも其投文と云ふものを途中に於て握り潰されれば善左衛門は犬死にある其節には私しの志のを綴で水戸の中納言治保卿へ七ケ條の惡事を認めた此書狀を差し上げ田沼主殿頭を捕て押へる樣に計らへ　秋「委細畏こまりました其處で田沼の惡事七ケ條を認めて秋殿に渡すお秋殿は之を守袋に入れて肌を離さんで兄樣の乃傷の當日を待て居る扨善左衛門は田沼へ乃傷して思い通り好く切り殺ろした推量の通り其投文と云ふもの誰の手に渡つたか途中で握り潰される善左衛門は忠義が貫ぬけないで遂々五百石は改易切腹となつてる父さんは番町の加藤伯耆守と云ふ屋敷へ引取られ妹お秋殿はどうしたと云ふと八丁堀地獄橋に住丁玄と云ふお醫者がある夫は阿母さんの遠縁のお方で其處へ往つて御厄介になつて居らつしやるどうか水戸樣へ御奉公をして兄樣の思し召しを貫ぬきたいと云ふ丁簡で段々下方の仕事を覺へて味噌漬を持て買物に往きなすつたり或は洗濯張物は勿論御飯炊きをする丁玄殿が　丁「どうも番町のお父さんの處へ聞へても斯んな事をさして置いちやア濟まない今度お前を嫁にやる氣だが町人でゐうあれ先方は七八人も奉公人を使つて居るのだ夫へ私しが話をしてやるから往てはどうだ　秋「誠に有り難うございますがマダ世間の苦勞をするのは嫌でございます、モウ両三年奉公さして下さる樣　丁「夫れではさうするも好い併しどう云ふ奉公をしたいのだ　秋「ニヽお旗本へ御奉公をしてはお兄樣のお友達にお

目に掛つては極りが悪いし一層私しは水戸様へ御奉公が仕たいと思つて居ります　丁「夫はどうも好ねい前の身分と違つてどうも只今の處で御三家へ御奉公などは出來ぬい頭の物やお金が入るから御三家へ御奉公と云つたらどうも出來ぬいと思ふ　秋「イエ重いお役を勤める事は誠に氣樂で苦勞でございますが部屋方に妾しは上りたいと思ひます部屋方は至つて氣樂で面白いものでございます　丁「夫れじや往きなさい往くのは好がおすねと云ふのは皆お陪臣だに依つて荷なひで以て水を汲むの胡座をかいて御飯を喰べるのつて誠にどうも賤しい奉公を仕なければならねいから夫は止めたら好からうどうか部屋方へお上げなすつて下さいまし」うちかと云つて淺町のお父さんの所へ問合せるとお父さんは扨はお秋が水戸様へ願書を差し上る積りだなと思ふから萬事留人の云ふなりにして置て下されと云ふ夫れじやと云つて段々口を探すと水戸様の老女に戸川と云ふものが部屋方を尋ねて居ると云ふので幸ひ其戸川様の處へ佐野善左衛門の妹と云ふ事が出來ぬいから房州内浦の漁師の娘で秋と云へば俺られると云ふ廉があつて惡いからてつと云ふ名前にして上げるサア人のする仕事まで横取りして働らくと云ふ位にして居るに依つて皆々可愛がつて「てつや〳〵」と云つてくれる當前の事をして奉公して居ては仕方がないどうか變つた事をして殿様のお目に留まる様に仕なければならんとお考へなすつて馬鹿の真似を始めた例巧になるのは一寸金でもあると直ぐ真似が出來るが例巧が馬鹿にあるのは難かしいものでお客様でも來てお話しでもして居ると可笑しくもない事をゲラ〳〵大口あいて笑つたり或は胡座をかいて御飯を喰べたりするから男方が　男「てつや前は來た時と大層違つて段々慣に歸つて了つたお客様が來れば可笑しくもない事をゲラ〳〵笑つたり又は賤人の様に胡座をかいて御飯と喰べたりするお屋敷へ御奉公する

のは何の爲めにするのだへ親達は行儀を覺えさせやうとしてゐ屋敷へ御奉公をさせるのだナセお前は胡座なんぞをかいて御飯を喰べる　てつ「胡座をかいちやア惡いのでございますか」房「惡いとも女は胡座をかく事があるものか踊りを踊つても女の踊りは膝と膝とが開かぬ樣に踊るものだ　てつ「姿しはモウ村に居た自分は胡座をかいて名主樣始めとして村々者共に褒められましたゐてつは行儀がいゝおてつを見習へと有度云はれました　房「胡座をかいてお前が行儀が好いと褒られたと云ふはどう云ふ譯だ　てつ「左樣で私し共の國では亭主が皆お漁師でございますから女房達が海へボカン〳〵と飛込んで鮑を取つたり海鼠を取つたりする繪に書いたる海女と云ふは色白く緋縮緬の褌とはあんだエアレは湯卷とか又は湯もじ又は腰卷と申すんじや又下帶とも云るもので　てつ「ハア夫れでは緋縮緬の湯もじでございますか夫を腰に卷き髪が艶々として長く後ろに下つて居ます

か中々眞當の海女と云ふのはソンナ女ではございません皆な潮風に吹かれて居るから色が眞黑く眞裸におつて海へ飛び込みますけれども伊勢海老と云ふ海老かございまして那の角でチヨイ〳〵と尻を突きます　房「嘘をおつき人が知らないと思つて　てつ「眞當でございます夫だから前へ突かれおい裸に鮑貝を附けます中には螺鈿の兜を下げ又は蛤貝小女なとは蜆貝なとを前へ下げて飛込みます　房「嘘をお吐きお前は人が知らないと思つて馬鹿ばかり云つて夫れからどうする　てつ「夫れから魚を捕ると陸へ上つて裸かで轉がるので皆お轉がつて居る其中に私しはチヤンとモウ胡座をかいて居ますからてつは行儀は好い〳〵と褒られました　房「成程胡坐をかいて行儀が好いと云はれるのは皆な臥て居るからだお屋敷ではソンナ事を云つちやア通らないから少しは行儀を覺へるが好いよ　てつ「御親切は有り難うございますが私しは蟲を

存じて居ります世の中にマア女で藝を知つてるものは私しが一番でせう　男「ウーンマアお前の藝と云ふのは琴かや　てつ「イヽエ琴おんどではありません　男「夫れでは三味線か　てつ「イヽエ三味線ではありません　男「琴か……花を活けるが盆栽盆石ヽてつ「イヽエ左様なものではありません藝と云ふは第一番に木登りをする鯱鉾立ち獅子の穴入り穴返り下り藤には逆さ大の字野猪の砂轉おんどと云ふ藝を知つて居ります木の葉の飛でも可笑しいと云ふ御殿女中腹を抱へて

○「成程是は御前は藝人だナテ其野猪の砂轉と云ふのは何だエ

てつ「左様でございます野猪は鉄砲を恐れますから松の木や杉の樹の側へ寄て自分の軀へ松脂杉脂を附けさうして砂の上に轉々轉げ歩きますから全で野猪の軀は鉄の様になつて鉄砲も通らぬ様になる其眞似を私しがやる之を野猪の砂轉がしと申します

○「どうだお前一ツ私達に見せておくれな

てつ「只だ見せろと仰つしやつても見せる事は出來ま

せん何か旨い物を下されば行て見せます魚などは私しの國が漁場であります故から喰べたくおし私しは八丁堀の伯父さんの處でお藏を買つて喰つた事があります故アノお藏が大變旨くて今まで其味が忘れられませんからどうかお藏の揚物が喰べたうございますが夫を下されば行て御覽に入れます

○「最と易い事だ御馳走するから」と云はれ何も斯も御存じて入らつしやるお秋殿が何時の間に覺えたかサア之れから御覽に入れますと持て參つた精進揚を充分に喰べて腹ゐおしに柱らへ登つて往く色々の藝盡しを行て見せるサア皆々面白がつて彼方でも來てくれ此方でも來てくれと云ふのでモウ終ひには旦那の御用は勤めないでソンナ事ばかりして居る少し位病氣でも藥を呑むよりはおてつの藝を見ると癒ると云ふので殿中一般の評判になつた夫が屋方治保公のお耳に這入る面白い女もあるもんだ其女の藝を見たいと云ふので七月の月初めの事で御酒を始めて居りますがお相手をし

て居るものは女中ふから柳川撿校と云ふのが琴を調べて御請仲の濱路と云ふ者が三味線さはしと云ふのが胡弓を彈いて三曲で御酒を召し上つて居だが　治「コレ〳〵撿校琴を止めろどうも盲人の藝と云ふものは陰氣で好んもの　撿「畏まりました　治「戸川之へ出ろ」戸川夫へ出る　治「エヽ其方の召使ひにてつと云ふ女があつて滑稽の藝を盛にて行ると云ふ事じやに依つてつと云ふ女を之へ連れて參れ余が君たいソコで戸川さん驚いた屋方樣の御前で藝をしてどうも見苦しい處を出す樣な事があつては大藝だと思つたから　戸「仰せにはございますが下方の者でござりまするから行儀作法も嘗まへませんから若し御目障りにでもなりますると恐れ入ります　治「行儀作法を知らんでも大事ないに依つて呼べ」と仰つしやる夫から房へ立歸つて來て　戸「サアおてつお前大藝な事が出來たすと云つてお前屋方の御前へ出るのだ　てつ「何でございます　戸「何でございまて屋形船へ乘つて御

餌を喰べるのてございますか　戸「著けた事をいひふさんな中納言樣の御前へ出るだよ　てつ「御前中納言樣と云ふのは何でございますか　戸「此方のお殿樣だ　てつ「ベエー大層お名前がありまれい第一番に水戸樣のお殿樣中納言樣屋方樣御前樣色々なお名がございますれ何で淡しが出ます　戸「お前の滑稽の藝がお耳へ這入つて今晩お前の野猫の砂轉かしと云ふのを御覽になるのだお前は行るかへ　てつ「どうも有り難うございますお氣に叶ひますれば何か美味ものを御馳走なされませうか　戸「夫はモウ御馳走をする段じやないお氣に叶へば結搆なものを頂戴されるのだ夫に就てお前は其若物を着て居てはおらんに依て此の帷子を着て此帶をしめ此處で例ものの樣にドン〳〵歩かないで徐かにしてお疊みの緣を踏まない樣にお闘を踏まない樣にスースッと斯う擦り足をしてお疊一疊の間へチャンと坐を付て低身平頭と云ふからお尻の上らない樣に腰をピッタリ疊へ附て口を叩ちやア

好けない　てつ「長ゐまりました　戸「面を上げィと仰つしやつたら面を上るのだ　てつ「ヘイ面とは何でございます　戸「面とは顔の事だ　てつ「ヘエー顔の事を面と云へば夫れじやア尻との事を新道と申しますか　戸「何だヘッンナ悪口を叩くものじやアあい面を上げィと仰つしやるとソーッと顔を上げ口を叩ちやア好けない　てつ「長ゐまりました戸川様は何にも知らないから丁寧に敬へて居るがお秋殿のおてつは何でも好く心得て居さつしやる其處で戸川の跡に附て往く御殿女中達はモウおてつの顔を見ると可笑しくて堪りません何藝を御覽に入れるのたらうと夫を樂しみにして夫に附て往くおてつは外の者とは違つて御本丸に於て勤めたお秋殿の事だに依て禮式行儀に少も亂れはない戸川は両手を仕て　戸「仰せに從ひましてをつを之へ召し連れましてございます　治「てつ其方は滑稽をいたすと云ふが何藝でも大事あいに依つて夫で匆々いたせ　てつ「存じません　治「何藝でも滑稽の藝をいたせ　てつ「存じません」戸川驚いて　戸「てつゐ前存ません〳〵と云つてお前が出て來て茲で只存じません〳〵と云て居れば妾しが失策　てつ「存じません　治「之れ〳〵戸川滑稽の藝を知らんと申せば何藝を心得て居るかてつが出來る藝を見たい聞てくれ　戸「お前は外に何かやるかエ　てつ「山田流の琴を聊さかに存じて居ります」夫れから戸川驚いて　戸「お前冗談じやあい山田流の琴だなんてお前は氣でも違つたのか　治「コレ戸川申し付けィ匆々琴を遣はせ」と仰つしやる夫へ琴を出す鶴龜と云ふお目出たい曲を一曲お聞き」に入れるやうとうも北速やかなる事に一同驚いた次に三味線をお聞きに入れる何れも長唄でどうも北聲は凛々といたして谷の戸出つる鶯の初音の如くで治保卿を始めとし一同感心いたし跡は胡弓を望まれ之もお愛めの聲の内に終りました治保卿御感心遊ばして　治「盃を遣はす之へ出ろお盃を頂戴すると　治「和歌を心得て居るか　てつ「聊さか稽古いたしまして

ざいます　治「題を取らせるに依つて一首詠め「織物に寄せる蟲」と云ふ題が出たサア水戸様の御殿だに依つて出來る面々があるかち皆々其の歌を詠む又出來あい女中衆もあるからお話しになる皆々其の歌を詠んで上る出來る人ばかりじやアお話しにならない屋方様が夫を御覽にあると「きりぎりす啼くや霜夜の狹莚に」ハテナ百人首の内に前五極様のお歌に「きり〳〵す啼くや霜夜のさむしろに衣かたしきひとりかもねんと云ふのがある其上の句を取つたんだとクス〳〵お笑いなさる　治「ナニ〳〵下の句に何とて松はつれなかるらん」何れも泥棒ものばかりだ之は何だと取上た短冊は「細子紬子紗や綿綿に猩々緋機織女の其側に切賦八ケ間歌くつは蟲かな　治「之はどうもどうも長い」と色々滑稽なのもありまず次ぎに差上たのを御覽になると

宵柳の糸を春しも切り置きて
今ぞ機織る蟲の聲々

宵柳と云へば春の題になる之は蟲だに依つて七月秋の題だ宵柳と云ふからハテナと思し召すと「宵柳の糸を春しも切り置きて今ぞ機織る蟲の聲々」　治「實に好う出來た加賀の千代が十五夜の會の時に「三日月の」と置てハテナと思ふと「三月月の頃より待ちし今日の月」三日月の時分から此十五夜の月を待つて居たと云ふと月の情が深く夫れと同じだと實に感心遊ばして屋方様が賞美をつに取らせらと仰つしやつて演綿綿を二十四御褒美として下さり一同の女中衆はアッと驚いた　○「實にどうもおてつには驚ろきいりました　△「どうして斯んな名歌が出來ませうか」と噂さして居る又々お盃を下し則へ參ると仰しやいました夫れお下へ成らせられますと云ふ時に　治「余人は附くに及ばんてつ一人來いと仰つしやいましたおてつはお手燈を持て御案内をいたします則の事を御用足し遊ばして之へ來いと仰つしやつておてつを一間へ引入れ　治「其方は房州内浦の漁師の娘と申すが何か存細ま

つて此所へ姓名を書はつて當家へ奉公をいたしたものと存ずる願ひ筋あれば取上げ遣はすに依つて申せ」天へも昇る心地いたしておつて「誠に御眼力恐れ入りましてございました妾は番町の御厩谷にて五百石を頂戴仕りまして佐野善左衛門の妹秋と申するもの兄善左衛門が天下のため爲めに去ぬる三月殿中桔梗の間に於て田沼山城守へ對して刃傷をいたしましたし併し投文をあ取上げになりませんに依つて私しの遺恨に依て刃傷とあつて堅日切腹改易と相成りました刃傷の前日に兄が妾しに田沼の悪事七ケ條を認めましたものを預け萬一犬死になつた其節は小石川のお屋方様にお願ひ申してくれと斯の通り田沼の悪事七ケ條を兄より妾しが預り居りました何卒此七ケ條を御取上げと相成つて山城の殿主殿を御詮議下し置かれますれば有り難き仕合せにございます」治保公御感心遊ばして　治「さうか傳左衛門は好い娘と好い伴を持つて嬉ぞ喜ばしからう之れへ出せ」と仰つしやつて

お取上げになつて御感になつて一々御感心をおすつた　治「善左衛門の願ひ取上て遣すぞ」と仰つしやいましたお秋殿は涙を流して喜び　秋「お取上遊ばされましたる事兄善左衛門冥土の旅は北盛り月夜の空を往く如くせゝ滿足に心得ます」　治「イヤ夫に就て善左衛門の妹と云ふ事が相分つては宜しくない矢張漁師の娘の積りにて奉公をいたし居る樣」　秋「畏こまりました」と元の處へ入らつしやいまして又お酒夫は誰も知つて居るものはない其七ケ條が殺に立て後に奥州白河郡白河にて十一万石松平越中守後に白河の藩弱と仰つしやつたお方此越中守へ仰付られまして田沼を捕て押へ四万七千石の處を一万石とおつて落若をいたした扱之は後のお話善左衛門殿妹に相談して頼んだに依つて之で宜しいと弼よ〳〵　田沼山城守へ對して刃傷をいたす

第七席

家來共には夫々暇を出しお寺へは手當をいたし伴善之助をお奴

さんに養育を願つたから之で宜しい只だ一ツお困りあすつたのは其お連合のおやをと仰しやいますお方之を其離縁を仕なければ里方へでも迷惑が掛つては餘に氣の毒どうか離縁をいたしたいと思し召したが採正しい奥様たに依つて離縁する譯にならい數年連れ添い子まで生したる中ゆえ斯々いふ譯だに依つてどうか里方へお歸んあすつて下さいと云つてお話しあすつたならお歸らないおとも為るまいけれども七人の子を生すども女に肌を許すなと云ふ事があるから殿上に於て山城守を刃傷すると云ふ大事を話す譯にも往かあい既に人皇九十五代後醍醐天皇笠置御籠城の時土岐藤人郎員と云ふものに其大事を話をした其の津野逸秩が齋藤左衛門と云ふ自分の親に之を注進をしたに依つて那の一大事は破れたされば どうも云ひ明けて話しをする譯にも往かあい只だ病氣〳〵と云つて善左衛門出仕をしない明くれば天明十四年三月の節句と相成つた今では五節句と云ふ事はお廢しにあつたが上巳の節句と唱へて翌日か巳の日ならを節句となし二日が巳の日あら之をお節句と申すのですが何時の頃にか三日が節句と極まつた名々御酒を召し上りお隣り屋敷やお向ふのお屋敷と御隣家は至つて陽氣だが佐野の屋敷は家来に暇を出し殿様は病氣で引込んで居るに依て空屋敷同様あり深々寂々として居る茲に本所割下水に住んで上様の御用人で村上大角と云ふ御仁がある夫はおやをと云ふ奥様のお父さんで去年の霜月二十五日の一件からはどうも善左衛門が刃傷でも仕やうと云ふ樣子に見へるに依つて若し刃傷とする樣な氣色あれば宜見をしてやらうと北思し召しで歸宅の折りに御駕籠谷の佐野の屋敷へ立寄つた善左衛門は病氣と云つてお出でなさるのでお父さんの傳右衛門實久と云ふ御隠居が出て御酒のお相手をいたして居る御酩酊あすつて　村「エヽ今日は善左衛門殿の病氣お見舞方々參つた御病室へ伺つて宜しうございますか　傳

只今善左衛門が之へ出て御挨拶をいたしますとの事で今日は即に快いと申しますから御悠緩召し上つて下さる樣　村「ハア左樣か夫なら之でお目に掛りませうと又々御酒を召し上つて居る處へ出て來た善左衛門お年は二十九で色白の處へ月代を生やかして居らつしやるから顏の色青さめて居る黑の紋付の衣類黑紋の羽織袴を着て善之助と云へる七ツになるお子も上下を着てお父さんに手を引かれて夫へ出てお出でなすつて　善「サア毎度お見御下すつて有り難ふ存じます今日は又好うお出てゝどざいました粗末なる御酒なれど御悠緩と召し上つて下されイ　村「ヤア姉殿只今お聞き申せば此両三日は至極御容体お宜しいと云ふ事此方の如き老人と違つて未だ三十歳未滿だから頓て本復するであらう　善「有り難うどざいます大きに當今は氣分も宜しうどざいます」善之助殿夫へ手を仕へい　善之「お祖父さん入らつしやい　村「之は〳〵善之助好う挨拶が出來ましたお父さんが御病氣

でサア御心配だらう併し追々快くなるから御安心あさい大層好くお顏が出來ました　善之「ハイ後程お目に掛りませう　村「ウン何處へかお出か　善之「ハイお隣りのお友達の處へ遊びに參ります　村「夫れが宜しからう　善之「後程お目に掛りませうと孫れて お父さんが呼び留た通りに御挨拶をなすつた時に大角殿が松「姉殿一間にばかり引込んで居ては宜しくない御酒を召し上つては　善「夫は私しも久々でどざいますに依つて頂戴仕まつる心得でどざいます」夫れからお盃を受け二献三献と召し上つて入らつしやる内に眼端がホンノリ櫻色と云ふ工合になつて來た」明日にも病氣全快のお届けをして登城をすれば山城守に斬付け改易か切腹になるのだと別れの盃かと思し召したに依つて善左衛門殿は水盃をする積りで呑んで入らつしやる其内大角殿が松「時に姉殿酒と云ふものは色々癖のあるものだ笑ふものも泣くものもあり又多狂もない事を眼立つもありる私しが酒と云

ふは人と議論をして見たいが病だ險する程の力がないが夫がソノ酒の癖だ今日婿殿に一ツ私しは尋ねたい事がある支那春秋戰國の時に程嬰杵臼と云ふものがある程嬰の方を忠義と思ふか杵臼の方を忠義と思し召すか」と云い出したが是にお話しがあるから程嬰杵臼のお話しをいたしませう只今十八史畧の内にもあります小供衆にもお分りでございませう支那春秋戰國の内に趙國王に劒と云ふものがある此劒と云ふ者の家來に屠岸賈と云ふ人があるが劒を殺し奥様を殺し家來を殺して其國を奪ひ取ると云ふ時に御殿へ屠岸賈の同勢が切り込んで來ると奥様が抱いて居た武と云ふ男の子を一寸座敷の上に置て片邊に在つた絹を其子供の上に被けて置た處が屠岸賈の家來が奥様を殺して了ひました其武と云ふ子が泣きもすると忽ち殺されて了つたのを眠むつても居なかつたが泣かないから是に氣が着かなかつた其時程嬰杵臼と云ふ忠義の者が抱て逃げたサア屠岸賈は誰れも彼も殺して了つたが悴の武が存命して居ては拵を高ふして眠むる時に両人は武を連れて山中へ引込んで來て程嬰杵臼に仰つて程時に杵臼お前は此子供を是れから先き守立てさうして旗擧げをするが易いか又屠岸賈を討て死をするが易いか」と云ふ時に杵臼が「されば成り敵陣へ切り込んで討死する方が易い、此小心さい者を守立て夫れから旗擧げを仕やうと云ふのは容易あらん譯だ　程「左樣かソンナラ爺公は守立る方にあらあいか敵陣へ切入つて討死をする役を勤めるか私しはどうも子供を守立て旗擧げを仕やうと云ふ方にある夫には斯う云ふ計事を以て仕やうと示し合せて夫から直ぐに程嬰が屠岸賈の屠場へ乘り込んで往つて程「扨貴下のお尋ねなさる劒の悴武と云ふものゝ在家を私しは心得て居ります夫に就て千金と云ふ御褒美を頂きたい　屠夫は千金二千金は愚か幾らでも褒美をやる其

時に両人は武を連れて山中へ引込んで來て程嬰杵臼に仰つて程時に杵臼お前は此子供を是れから先き守立てさうして旗擧げをするが易いか又屠岸賈を討て死をするが易いか」と云ふ時に杵臼が「されば成り敵陣へ切り込んで討死する方が易い、此小心さい者を守立て夫れから旗擧げを仕やうと云ふのは容易あらん譯だ　程「左樣かソンナラ爺公は守立る方にあらあいか敵陣へ切入つて討死をする役を勤めるか私しはどうも子供を守立て旗擧げを仕やうと云ふ方にある夫には斯う云ふ計事を以て仕やうと示し合せて夫から直ぐに程嬰が屠岸賈の屠場へ乘り込んで往つて程「扨貴下のお尋ねなさる劒の悴武と云ふものゝ在家を私しは心得て居ります夫に就て千金と云ふ御褒美を頂きたい　屠夫は千金二千金は愚か幾らでも褒美をやる其

武と云ふ者を殺してから其裏美をやるサア何處か案内をしろ」屠岸賈を連れて山中へ駆込み　程「那に居るのが杵臼と云ふもので其杵臼の膝に居るのが武と云ふ小伜」と云ふから屠岸賈の同勢は杵臼を目掛けて打て掛る杵臼に於ては劔を抜き放ち屠岸賈の同勢の中へ切込み遂々討死いたす其所で手もなく武と云ふ侍を切て了ふモウ之で跡腹が病めないと程嬰に褒美を下れた其殺されたのは武の身替りで別に山の奥に武と云ふ子が存命して居るんで夫れから程嬰が艱難辛苦をいたして武と云ふ子を守立て旗擧げをした前に逃去つて居た朝の家來が程嬰の旗擧をいたすと云ふ事を聞きエヽトカ〳〵集つて來て遂々屠岸賈を攻めて趙の國を取返し公さんの餘羅の妄執を慰さめた之で宜しいと程嬰は死んだ杵臼に此注進をばしやうと云つて自殺いたした實にどうも惜むべきものは此程嬰杵臼である此話しを始めた時に善左衛門手を仕て　豐「申し上げます其子を守立た程嬰も忠義から敵中へ切込んだ杵臼も忠義忠義と云ふ字に疑ひはないけれども併し私しの身に取つて見れば中々其子を守立て旗擧げを仕やうと云ふ事は出來ません敵中へ切込んで討死をいたしたと云ふ杵臼の方を天晴れ好い勇ましい人と心得ます明智日向守光秀の家來明石儀太夫と云ふ者の辞世に

　　引取りの數に入るさの身となれば
　　借しまれにけり夏の夜の月

主家の爲めにならんと云ふ時は片端から切て〳〵切り廻つて叶はんと云ふ時には割腹いたすか切死をいたすか抽者は其心得でございます杵臼の方を天晴勇ましいと私しは心得ます」大角殿が扨は善左衛門は乃傷をするの丁簡だなと思し召したから　村「イヤ夫は何ふ見すれば武士たるべきものは君父の爲めには如何なる恥辱を受けやうとも夫を耻辱とせず忍び忍んで君父の先途を見届けるが忠孝と云ふもの只た死んで勇ましいと云ふのは暴虎馮

河の勇にして取るに足らない早く云へば野猪武者と云ふものゝ若い内は兎角どうも勇氣に逸る死んで勇ましいと心得ると仲しやるが夫が大に過ふ貴公は傳右衛門と云ふ双上もあるし善之助と云ふ當年七歳になる愛らしい悴もあるし必ずや死ぬと云ふ御了簡をお出しあさるな」善左衛門目に角を立てゝ　善「ゐ扣へなさい町猪武者とは何事でござる身不肖なれども五百石を頂戴いたす天下の旗本野猪と云つて畜生に喰へられては捨て置かれないで　村「イヤ何も貴公が野猪武者と云ふ譯ではない若い氣でやるので野猪武者と申したので　善「イヤ拙者を野猪と仰つしやつた善左衛門が中興の先祖は伏見戰爭の時に功名を顯はした佐野肥後守でござる朋輩の前も先祖に對し野猪武者と云はれては捨て置かれません元より連合はざるは不孝の元我は僅か五百石拾貴公様は二千二百石一人娘を野猪武者の處へ縁附てる出でおすつたら嘸御不足でございませう野猪の縁を取たと云へば貴公様もお家の瑕瑾となるに依つて拙者は野猪でござるからやをを離縁やたしますからお引取り下さいどうも拙者を野猪と云つたからには捨て置かれんやをを離縁するから引取つて下さい」と云つて廊を立つて奥へ往く跡見送つて大角殿が　村「時に御隠居どうしたものだ貴公も聞かれる通り何も善左衛門を指して野猪武者と云つたのではなく若氣で行るのを野猪武者だと喰へて云つたのであるに依つてどうか御隠居より御仲裁を願ひたい」傳右衛門殿は下俯向ひて居たが扨は善左衛門は覺悟をいたしたと見へると思つたが　傳「併しアレが當人の病氣でございます自分が思ふ通りに仕おいと云ふと當人の病ひに逆らうかと存じますから一旦之はやををお引取り下さい老人の役目でございするに依つて頓て再縁を取結びまする」大角扨はお父さんも申し合せの上だなと思つたから　村「ア、宜しい御仲裁願はうと存じたら善左衛門殿の病氣に障るとか病氣見舞に來て病氣に障つては相済まんやを

を離縁とあれば此方は引取るより外にいたし方がない引取りませうされば之にてお暇いたしませう」傳右衛門殿立上りてお送りをする　村「イヤお揃ひ下さるな」とお乘物にてお歸りに相成る、善左衛門殿はお召し物を着替へ野斗目上下を着け玄關の窓の障子を明けて見ると馬大角殿お戻り、夫に雨手を仕て　善「只今は緘に失禮を申し上げました心にもあい惡口雜言お免しあされて下さる樣昨年霜月二十五日より双傷の決心を仕つりまして貴馬へ御迷惑を掛けてはならんからやをを離縁致さうと思へど之と申して去る厥もございませんが只今お話しの内に野猪武者と仰つしやつたを幸ひに離縁致さうと決心致しました御縁あつてやをを嫁り當年で八ヶ年になる善之助と云ふ一人の倅まで擧けまして厥も厥れもせぬ中を離縁すると云ふは容易からんこと御賢察おすつて下さる樣お戻をお送りもいたさぬ何卒御免し下さる樣にと云て馬を上るると最早お槍は横に曲てもウ見ぬい

第八席

夫れから下へ降りて入らつしやる、自分の間に至り　善「奥、を之へ呼べ」と云はれ、奥樣はお父さんと善左衛門樣が何か御論をなすつたとの事女から聞て御心配な處へ呼はれたから善之助の手を引てお出でおすつて見ると云ふと例と顔色も變つて御腹立の樣子南手を仕て　やを「何か御用をとさいまするか　善「アヽ善之助此方へ來い」と善之助を御自分の側へ呼寄せ　善「サテやを外ではお い只今其方に離縁をいたします、本所の屋敷へお引取り下さい」とツクリ申いたるおやを殿　やを「妾は御離縁をされる愛にはどざいませんどう云ふ譯でございますか　善「されば先刻お父上が拙者の事を野猪武者と仰しやつた、お前は野猪武者と云ふ畜生に喩へられた者に嫁して居るのは不足だらうイヤサ不足でないにも

しろ私しは離縁をするから本所の屋敷へお引取り下さいお父上も送り越せば引取るとの仰つしやつてお帰へりになつた委しい事は御親父にお尋ねなさる様、早々お引取り下さい、兩手を仕ておやを様考へ　やを「どの様お事を申し上げましたかどうも父は御酒の上が悪うとおいますから何度さう云ふ事がございます、妾しよりお詫申し上げするがどうか此度の事は御了簡を願いたうございます　善「イヤならない其許が詫をなすつて肯く位なら私しは口外はいたしません、子まで拵けたる中を離縁すると云ふのは容易からん事だ善左衛門決心をいたして申すだに依つて決して跡へ引かないウロ〳〵して居ずと匆々お引取り下さい」御決心の様子、おやを様は細月からの事を存じて入らつしやるから其心を察しました　やを「成るまりました、夫れでは本所へ引取ります併し善之助と云ふ子までおしたる中でございますに依て決して他へ漏れ聞へまする様お事はいたしませんから、實は斯々斯様と一

旨仰つしやつてお聞かせられましたら有り難き仕合せでございます　善「イーヤ離縁致する其許に何も云ひ聞せる事はありませんやを「左様で……委細承知いたしました、夫ではお暇仕まつります其節は既分首尾好う事を遊ばしまする様影ながら……　善「何と申す　やを「ハイ　善「何が首尾好うだ　やを「首尾好く二度の奥様をお迎へ遊ばしまする様と申しますので　善「左様か二度の奥を持つ持たんは其許の預つた事ではありません、益もない事を云はゞ、別に某しに拵はす　やを「さらば御機嫌好うと兩手を仕て居る善左衛門　善「ヤツ少しお待ちなさい　やを「ハイ　「善之助只今阿母さんを父が離縁いたすからはモウお前の阿母さんではない長々の間御厚情に預りまして有り難うございますと好くお礼を仰つしやい」兩手を仕て善之助がして有り難う存じます、モウ私しの阿母さんではございませんか」と膝に縋つてワツと泣き出した、おやを殿も涙を袖に絞りまして

善之助の類に知を當てゝ　やを御存命でさへあります事ならば又お目に掛れます事もあります、妾しにお願を仰つしやるよりお父上に安くお願を仰つしやる樣に」と又もや跡を云はんとするを善左衛門心弱くては相成らんと思し召したに依つて伴來いよ〳〵小姓に抱へ北御奥のお座敷へ駈入てゐう、おやを殿はモウ之が今生の別れと御自分のお部屋へ入つてお支度を遊ばして御隠居傳右衛門殿のお座敷へ來ると寅久と云ふ御隠居今日伴の心を推量すれば酒でも飲まあければおりませんお酒を上つて居ても少ども酔はん、處へおやを樣　やを「申し上げます　傳「ヤ誰かと思つたらおやをか支度をして何方へお出か　やを「只今當家を離縁されましたに依つて本所の里方へ引取ります、隨分御機嫌お宜しく」傳右衛門殿両眼に涙を浮めて下俯向き、扨は善左衛門覚悟をいたしたか不便の者や氣の毒の者やと思し召して歯を喰ひしばつて居らしつたが　傳「左樣か何だか気剣顔をして居た樣だがヤ、一旦

ふ引取りなさい年寄の役目であるに依つて私しが再縁を取り結びませう又善之助と云ふ伴も決して他人の手へは掛けません、私しが悪い樣には取計ひませんに依つて一旦の處はお引取り下はる樣に　やを「畏まりました」さうは云ふものゝお父さん御承知の其上に離縁なさるのか妾が離縁になつた其跡では善左衛門殿が及傷をするが、善之助もお容めを蒙むらば誰が此お父上を朝夕お世話をいたすか餓にお氣の毒の事よ如何いたして宜しきかと涙にくれて居る、傳右衛門殿はお手づからお盃を取り酒を頂りに飲んで居りますが心に障る事があるに依つて少しも酔はないから夫れへ打倒にゐるおやを殿も仕方がないからお玄関を指してお出でになると今に殘つて居る番町御厩谷の佐野の櫻今を盛りと咲き亂れて居るおやを殿は足が此櫻の見收めかと竹すんで居る時に牛込の入相の鐘がボーンと鳴行無常を告げ宜る、　やを、頭を持てと仰しやりおやを殿短冊へサラ〳〵とお認ため遊ばして

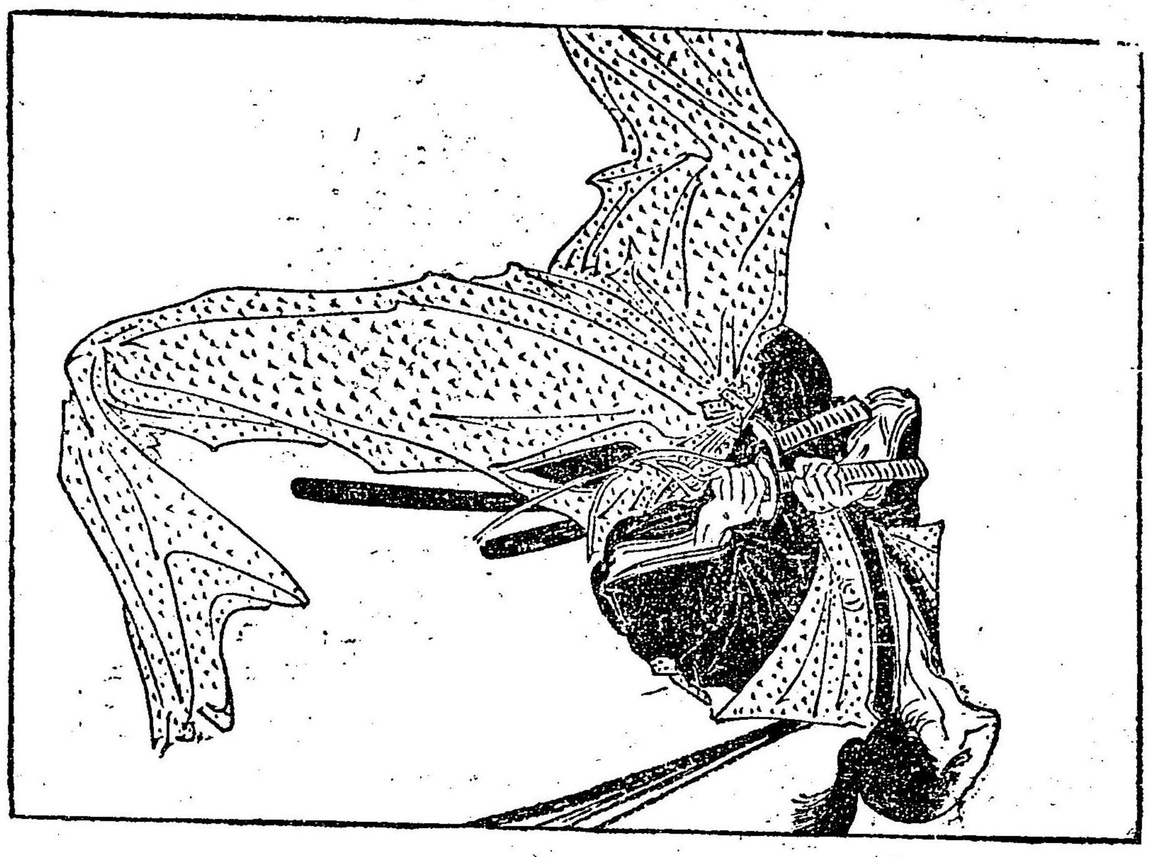
お玄関の正面お格子の處へ置て飛ばない樣に御自分の持てる鞭を文鎮の代りに夫に載せて置いて一足往ては二足歸へり三足往いては四足歸り振返へり〳〵漸々に本所のお屋敷へお歸りになつて了う、跡で善左衛門殿取上げて見ると

入相の鐘を聞くにもいうがれて
歸るを惜しき花の一もと

入相の鐘に歸へるを急がれると雖ども併し歸るに惜しき花の一本と云ふのは善之助の事であらう心殘りの事であらうが併し之で心に掛る雲霞もなし」と直に病氣全快の屆書を出して其月二十四日桔梗の間に於て山城守へ切り掛るの一件

第九席

彌よ〳〵奥方を離縁をして病氣全快のお屆けを爲ずつて夫より再動いたし今日は田沼を切らうか明日は切らうかと思ふ處が御分にも場所が殿中なり御老中の時あく勢ひの田沼の悴山城を切るので宜しい場合がある、今日はと思つて新御番所の薄暗い處で刀の柄へ手を掛けて見るとお下りにあつて來たのは大目附松平對馬守ヒックリ驚いて善左衛門刀を後ろに置して兩手を仕て居る難かしい役は大目附御當番お目附御當番御老中でも若年寄でも殿中刀を差して往く驛には往かないが御當番の大目附は刀を差して殿中を往來する夫故小身のお方は當番のお目附を見るとアッとするお羽目の間の内へ逃入ると云ふ時皆々手を仕て刀を取つて左りへ提げて歩いて入る將軍家が御馬に乘ると云ふ時皆々手を仕て刀を下げて居るが大目附ばかりは立上つて踏方へ目を配つて居る將軍家の身代りになるお方だからどう云ふ者が來るか礫が飛んで來るか分らないされば大目附と云ふ役は難かしうございます、其大目附の御當番だに依つて善左衛門何をして居ると咎められてはッ夫迄の事、尻目に對馬守は善左衛門を見て　對「さうして居れ〳〵二百仰つしやつて行過ぎて了う、善左衛門小躍りをするば



かりさうして居れ〳〵と仰つしやつて見遣して下すつたに依つて後ろ姿を伏し拜んで居る處へ山城が葵御紋の附てる肩衣を用して下りて來るが御代々の御恩を蒙むる上様の御紋附たる衣服を血を以て穢しては相濟まんと其日は見遣した、又翌日見ると又葵御紋服を着用して居るから善左衛門及傷をするとが出來ない其處で山城の屋敷へ出入するお坊主に夫とはなしに世間話の序に聞く　善「山城守は何日も葵の御紋服を着用して居るが御自分の衣服は召すことはないのか　坊「左様て山城様は御家例でございますか一日葵御紋の附てる召物を着ると三日の間着て入らつしやいます、四日目になつて御自分の七曜星の附て居るお召物を着て居らつしやいます、四日目には代りますので　善「さうか」と指折て數へて見れば二十一日二十二日二十三日の三日經つて四日目の二十四日には自分の七曜星の附いたる衣服に代るに相違ない扨及傷は弱よ〳〵　明日ど極まつたと善左衛門は大きに喜

んで屋敷へ下つてお父さんにお目に掛つて　善「斯々云ふ事を承りました」に依つて弱よ〳〵　明日みそ及傷をいたす必得でございます　傳「左様か去年霜月より覺悟いたして居るに依つて今更ら改めて暇乞ひには及ばない隨分明日は心氣を沈着て仕損せざるやういたせ、明日は遇ひませんから左様御承知おさい　善「畏まりました申し上げたいお事承たまはりたい事もあるけれども未練の者よと笑ひあるだらうと思ふから其儘御自分の部屋へ引取り其夜お眠みおさるとどうも眠られませんと云ふのは御尤も千万御先祖代々頂戴をいたした五百石を抛つてお父さんを跡に殘し七歳にある倅を跡にいたして罪咎のない奥方を御離縁におつて命を捨てやうと云ふのだに依つて御尤ども至極市ケ谷八幡の八ッの鐘を聞てお起きになつてお庭へ出て充分に水垢離を取り日光の東照大權現へ願るには私しの道俱の爲に及傷いたすのではなく天下のお爲めに及傷をいたすのだに依て何卒遂げさ

せ給へと祈念をして之は櫛現様もお守り下さるだらう、又御自分の御寢所へ引取ると間もなく夜が明ける嗽手水も済んで先祖の佛壇に拜賀終つてお膳椀も済んで御饌と云ふ時に鮫鱇のお吸物、鯉の筒切にいたしたお燒物香物一切御饌を三椀輕く召し上つた鮫鱇と云ふ魚は居酒屋なんぞに下つて居ると誠に不体裁のものだが昔しは皆々お吸物にして召し上る、之は肉をしめる、もので自分の腹を切て餘り血が出ないと云ふ鯉と云ふ魚は、決して燒かない魚で活料か又は赤味噌に入れて鯉の濃漿と云ふ之は敵を切らうと云ふ了簡で鯉の筒切を召し上つた今では澤庵と云ふて停滯すると云つて西洋好の方は喰らない、併し二年でも三年でも貯へ漬と云つて昔しは澤庵が深かおけれは本膳にはあらないデ香物は三切は身を切ると云ふので縱ひ、一切は人を切ると云ふので縱う、夫故モウ二切か四切に限つたものので夫を今日は山城を切らうと云ふ當日だに依つて一切でとざいます、其處で御膳も三椀輕く

召し上る昔しから大食して後世へ恥辱を殘したるは八幡太郎義家の家來で陶割四郎と云ふもので前九年の奥州征伐の時八幡殿が功の座の膳の座と云ふものを拵らへて手柄のあつたものは功の座の方で酒肴で飯を喰ひ手柄のないものは膳の座で漬物位で御饌を喰べる故に誰も功名をして其功の座へ座つて食事するのを樂しみとして居る處が陶割四郎と云ふものは何日も膳の座ばかりへ座つて食事をする、或一日の事功名があつて功の座の方で御饌を喰べる其時にどうも恐ヒく大食をした處へ貞任の同勢不意に押して來る夫出陣と云ふ時に陶割四郎薙刀を杖にして立て居ると敵の箭が飛んで來て陶割四郎の首を切つた其時に血が出ないで其咽喉の切口から御飯が出る魚が出る香の物が出る實に死骸が見苦しかつた、夫故彼の木村長門守重成と云ふ人は討死をする前に食事を減した、其處でお迎合ひがモウ我夫長門守は討死すると云ふ事を知つた、されは三椀を輕く召し上つた善左衛門は

お父上のお座敷に向つて両手を仕て、餘所ながらお暇乞をした、前申した御本丸から下つて居た妹お秋と善之助殿が暇乞をしやうを襖へ手を掛けたるを善左衛門はヒタリと襖を閉てゝ、「決して遇つてはならない今遇つては善左衛門が悴の愛に引かされる様な事あつてはならない、遇いたいのは尤もだが遇はせる事はならない」と云つて襖をお閉ておすつて善之助を抱き上げて奥の間へ通ゝる、善左衛門殿に於ては御玄關へお出でになると後世の今に残つて居る庭前の櫻モウ二十四日で為るに依つて大概は花も散つたが之が今生の此櫻の見納めかと誰殿のお屋敷にあるものやらんと式臺の處へ立上つて櫻を眺めて居らつしやる處へ表より慌てゝ来つたのは子飼からの犬、善左衛門殿の裏の處へ廻み附いてワン〳〵吠へて居る善左衛門刀を抜くと犬を夫へ切り殺す家来の面々は驚いて居る善左衛門殿は犬が飼主に喰付うとしたに依つて手討にしたと云つて日當りが宜しい處だに依つて其刀の血を乾し付て居る何の爲めだと云ふに犬の血の付た刀で切ると云ふと其切口を縫つてるハゼて縫ふ事が出來ない又一ッには又偽をいたす血祭りにと犬を切たので其處で刀を鞘に納めて馬に召して大手下馬先の處へ掛つて來り下馬いたした時に善左衛門殿馬の額に手を掛けて　善「勇士の功名は馬に在り、今日は其方に別れねばならん、我無き跡は誰殿の御乘馬になるとも隨分達者に活て居る様モウ遇はんぞ」と仰こしやいました、其時に馬は首垂れて畜生ながら主人の心を察したものかヒーン〳〵と嘶いた、平生馬の嘶くのはイボーと云ふ一生懸命の時になくを嘶くと云ふは嘘の様なお話し後に此馬が彼方へ飼はれ此方へ飼はれて遂々田沼主殿の屋敷へ飼はれ翌年三月二十四日山城の悴龍助と云ふものが馬に乘つて居ると祖父さんの主殿が夫を煙草を召し上りながら見て居ると其馬が狂つたから龍助が馬より落ちると夫れ若様がッと云ふ内に馬は前足を以て龍助を抱ひ込み咽喉管の處を喰

ひ附てどうしても離さないデ御馬役の一人夫へ駆寄つて脇差しを稍ぐるみ拔いて馬の鼻へ通した、其處で匿へて居た龍助を放した、好く子供が母の乳房を匿へた時に鼻を抓むと放すと仰つしやいますが夫と同じ事で馬も鼻の穴へ脇差を稍ぐるみ突込まれて咽喉管を噛切つたからモウ龍助を放して駆出した夫れ打て殺せと多勢の騒ぐを其馬は跳飛し跳ね飛ばして颯然に浅草門跡の寺中神田山徳本寺の菩左衛門の墓の前へ來て此馬が死んだ、落首と云ふものは多猥もないものゝ様だが其時に出來た落首は

子は切られ孫は喰はれて午の年

秋の彼岸に下る雁の間

と云ふ落首が出來た、畜生でも感心あるものである、奥州より丹羽左京太夫と云ふ人が献上した布引と云ふ馬は二代様の御乘馬で一反の布を尾に附て走る時に其布が地に引かぬと云ふ其處で布引と云ふ名前を附た二代將軍薨去にあつて其馬を芝増上寺の寺内へ放した今と違つて草も澤山あつたに依つて其草を喰へて其馬は飼殺しになつて居る正月の二十四日二代將軍様の御靈屋に御代參がある其時に其馬が御門の處へ來て前を折つて辞儀をして居る、其馬の死んだのを増上寺の寺内へ葬むつたのが布引の社と云つて殘つて居る、又井上九郎と云ふ者の乘馬河越太郎と云ふがある、天草合戦の時に一番乘りをして空壕の際へ來ると此馬が進まないと云ふのは空壕の内には地雷火が仕掛けてあつた、されば今でも其馬の社は殿つて居る、又本多平八郎の鼠鹿毛と云ふ馬は慶長十五年本多忠勝が病死いたした時に其馬も死んだと云ふて未だに上總の大多喜に馬頭觀音に祭られて居る、又加藤清正の帝釋栗毛と云ふ馬は加藤清正が大きいから其馬も大きいが加藤清正が死んだ時に又其馬も死んだ、ヲヲ見れば馬と云ふものは畜生とは云へ愛むべきものでございます、夫は後のゆ話し、菩左衛門殿は登城をして新御仙へ來ると御同勤の萬年六三郎、田川惣兵衛

等は善左衛門が刀傷をすると云ふ事を知つて居る、六三郎は夫へ進んで　六「サテ佐野氏マダ御血色が至極お悪いが御病氣は御全快になりませんか　善「毎度〳〵御尋ね下し置かれまして有り難き仕合せでござります宋だに全快いたしません併し今日邊りは全快いたすかと心得ますお喜び下し置かれまする樣に　六「左樣か隨分お大事になさる樣、成程山城を及傷すれば病氣は全快するでございませう頓て善左衛門は翌御番に在つてお下りを待つて居ると若年寄の御同勤と申すは米倉丹後守、酒井大和守、狩野遠江守、太田備中守、夫れから田沼山城守、此お四人が下つて來る逆の盃きる時は仕方のないもので今日は裝御紋の附たる衣服を着けて居りません、善左衛門は一足山城守を行り過して善左衛門後ろから　善「山城待て……」と聲を掛けた、振返る途端に二尺三寸永正鍛定の一刀を以て切掛た左りの頬の顔穴の邊りから顎へ掛けて一刀ズッと引た　山「善左衛門刀傷いたしたお出會候へ」と逃出した

又跡から袈裟切りに切り下げられた、時に山城守御如才ないことには奥の方を目掛けて逃往く、お人名が登城をするにはお玄關正面お旗本はお中の口から登城をする、御老中若年寄はお石の間と云ふ處北のお石の間と云ふ方で善左衛門が山城へ切り掛けたのだから奥の方を目掛けて逃込んだお鉄の内へ這入つて了へば將軍樣のお居間善左衛門は來る時に往かあいと斯ふさうも火急の場合にも感心お之へ氣が附た善左衛門は又も追つて來ると井上國藩頭と云ふ御人がお下りになつた處へ山城守が血だらけになつて逃來り助けてくれと云ふを無體者と云つて拳を固めて打き飛ばされ山城守北處へ仆れ又起きてお杉戸の處へ駈け付けて開けて〳〵と云つて引掾いて居る、先剛からお杉戸を細目に開けて其樣子を見て居た松平對馬守山城が逃來るを見て突然閉めて後ろから杉戸を開かない樣に押へつけて居る、夫は弓矢の情けと云ふもので殿中で刀を抜いた時には家名改易切腹と極つて居るか

ちどうせ切腹になるものから首尾好く殺ろさせ様と思ふから杉戸の後ろで押さへて居る、善左衛門は追つて來て　善他日の遺恨に思い知れ」と後より切り下げたアッと云つてノッケに仆れる頭を左りの手を擧げて防て山城守の腕を確かり押へて咽喉の處を鎖も拳へ徹れと云ふ勢いで突通した、其時に對馬守が待てと云つて後ろから抱き付た、振返つて見ると對馬守だから寝んで及を前へ投げ　善何卒御法通りに願い申します」と云へる處へ又一人駆寄つたはゐ目附久松筑前守悪くい奴だと云つて打擲をする、時に對馬守　對ゐ拘へあさへ打擲いたして宜しければ此方で打擲をいたす當人は刀を投出して神妙にいたして居るものを打擲して苦し抗でも附てはどうなさる善左衛門の腕は是は今日天下の国人となつて居る」久松筑前守赤面をして其處を逃て了う其處で善左衛門が切腹改易にかつて了つた跡で對馬守は二百石御加増に相成つた其時の落首に

抱止めし紋は扇の要石
對馬のかみのあらん限りは

サア殿中に及傷があつたと云ふので上を下への大騒動、泰平の世いた今日殿中で若年寄が切殺されたと云ふ時に其下馬先の騒動は又格別ゐ俄仕の者共は俺がまだ人であるか私しが且那であるかとどうも下馬先の騒動は一方ありません、其時に榊原式部太輔ゐ組頭與坂彌六郎と云ふ者立擧つて大音に　彌ヤア〜　訂家の陪臣其鎮まれ〜　殿中桔梗の間に於て佐野善左衛門が田沼山城守へ對して及傷をいたし善左衛門は殿中にて大目附松平對馬守捕へたりと呼はつても多人數の事であるに依つて少しも分らず依て鳥組を一枚外して表返しにして夫へ其趣きを書く殿中桔梗の間に於て佐野善左衛門、田沼山城守へ對して及傷いたし善左衛門に於ては大目附松平對馬守之を捕へたり皆々鎮まれ」と夫を大勢の者は見てアヽ好かつた俺の主人でたかつたと喜んで鎮ま

つたが田沼の家來共は屋敷へ立歸つて其趣きを主殿頭に告げゐ主殿頭は之を聞より取るものも取敢へず登城いたし浮山城の死骸を見て居りましたが扇子を以て肩の處をポンと打なされ主「山城死骸が見惡しいぞ」と云つて御自分で部屋へ死骸を取片附た處へ御老中稻葉丹後守御慰傷千万と云つてお悔みを述べて居る、其處へお坊主が一人　坊「申し上げます、幕左衛門が先刻山城殿に對して及場を仕つりました時にお杉戸の内に這入りますれば斯樣にはなりますまいものを然る處松平對馬守殿お杉戸を押へて居りましたから山城殿が内へ這入る事が出來なくて斯樣な御最期を遂げました、誠にお氣の毒でございます」と云つた其處へ主殿頭　主「扨は幕左衛門に力を藉へたものが松平對馬守であるか、對馬守は山城に對して遺恨でもあつて助力したのか之は一通りお調らべ下さい」と稻葉丹後守にお頼みになつた、稻葉殿は大番田沼の尽力に預つて御老中になつたもので　稻「委細承知仕る

つりました、匆々對馬を呼べ」と云ふと御内緒のあるものだから、對馬守は御寢美でも出る事だらうとて其處へ來ると正面には稻葉丹後守傍らに主殿正が居る、兩手を仕て對馬守　對「何か御用でもございますか　稻「サテ對馬外ではないが先刻幕左衛門が山城へ對して及場をいたしたに依つてお杉戸の内へ山城が這入られなかつたのは赤たまはれば其方がお杉戸を押へて居たと云ふ事だがどう云ふ譯だ何か山城へ對して宿意でもあつての事か夫とも其方は申し合せた上事をいたしたのか」對馬守　對「申し上げます血だらけに相成りたる山城守が幕左衛門に追はれてお杉戸の内へ這入らうといたしたり依て御座の間近い處で萬々一御身休にお怪我があつては恐れ入ります仮令へお怪我がなくとも御座の間近くを血を以て汚しては恐れ入ります、斯る非常の時に私しが閉めましたので、閉めて惡い事なれば元々お杉戸をお拵らへに及ばない、斯る場合に閉切るべきものと存じましたに依つて閉切り

ましたのは好く仕たと御褒美を下さる事と思ひます」成程尤もだといふので稲荷ばら追つて褒美の沙汰に及ぶ」と其處で善左衛門は上屋入りを仰せ付られました、山城守怪我人の積りで和田の屋敷へ引取る其時に出來た落首が

登城にはホー〳〵云ひし山城も
迫出がけはホー〳〵の目で
山城の白い衣に血が附て
赤年寄と人や云ふらん

御先祖は梅松櫻を鉈で切り
我は刀で山城を切る

之は佐野の先祖佐野源左衛門常世と云ふ方が梅松櫻の三木を切て最明寺時頼に御馳走したと云ふ昔しがあるに依て出來た田沼浦打山でゝ見れば「うろたへの」ふいの深手にいきはたえ〳〵

第十席

又川柳の方は

惜つゝと一口の内後家二人

田沼の妻と佐野の妻とが一時に後家になつたと云ふのは誠に情けない事で善左衛門が山城へ刃傷を致す時に投文をいたしたるを何者か之を握潰して了つたので私の遺恨で刃傷をいたしたと云ふので彌よ佐野善左衛門は家名改易切腹となる、善左衛門の遺出しまして投文と云ふものは途中で握りつぶしたものがあつて御採用に相成らん出處で只だ私しの遺恨を以て刃傷と云ふ事にふつて上屋入仰せ付られました、御老中の勢ひを以て情の歎討をする所だに依つて主殿頭の計に依つて善左衛門娘は上屋に於て未腹となつた徳川様始まつて上屋切腹は此人が元祖で實に稀い

取計ひでございます翌日の四月二日お検死見届の役人として大目附山川下總守、町奉行甲斐庄飛騨守、與力佐野五郎左衛門、原田和田五郎、同心太刀取高木伊助、石出帯刀お鍵番が八人夫へ御出張あ相成つて、善左衛門は勿論無紋の麻上下、水髪と云ふ頭で油を付けない髪で兩手を膝に載せて扣へて居る後ろへ四枚折りの屏風を立て之を其腹切屏風と云つて悉く徳川時分には嫌つたものでご時に山川下總守善左衛門に向つて

山「善左衛門　善「ハイ　山「其方儀三月二十四日殿中桔梗の間に於て重きお役人に及傷に及ぶ不届に付厳科にも申し付べき處御格別の思し召を以て御法通り切腹仰付ける、尤も之までの領地三州白須賀に於て五百石改易相成る有り難くお受けをいたせ」時に善左衛門頭を上げて　善「重きお處刑仰付らるべきの處切腹の段有り難き仕合に存じ奉ります、御役目御苦勞千万に存する」と振返つて高木伊助にも太儀と仰しやいます　善「善左衛門一つお願いがございます、お聞濟み下し置かれる樣願ひ上げます　下「何じや　善「手際の腹を仕つりたうございますお聞濟み相成りますれば有り難い仕合せでございます、切腹仰せ附られると云ふと体裁は宜しけれども又物を持たせる樣ではない身竹を二枚合せて自元結で三處計り結ひたるものを三寶の上に置く夫を頂くと首を切り落すので手際腹と云ふのは自分で腹を切るので夫をお聞濟み下さる樣願いますと云つたから死骸を頂戴に上りましたる親類春日作太郎と云ふ者を呼寄せ善左衛門の脇差を取出させる柄も鋼もハヤキも取つて下つて中身許りを紙へ卷いて渡す　善「誠に有り難き仕合にございます時に原田和田五郎と云ふ御人お進みにあつて　原「善左衛門殊左衛門の處へ申し送る儀があらば傳へて遣はすから遠慮なく申せ」善左衛門有り難涙を流して下俯向いて父さんの事や七歳になる倅善之助離縁になつたお迎合の事を忘れる日と云つたらばないから有り難き御一言に善左衛門涙を流して居たが　善「御

芳志の段有り難く承たまはる之とて申し送る事もございません
辞世の句を云ひ残したうございます、お筆をお執り下さいまし
原「左様か」と原田和田五郎紙と筆を執ると善左衛門
善「今一句お願ひ申します
急ぎなん誕生佛の日も近し
善「之を父傳左衛門に送り下さる様　原「委細承知いたしました
善「之れにて心置く事はございません　卒御見届け下さる様」と右手
に刀を取り左腹に突立てキリ〳〵と切り廻はす、後ろに立て居る
高木伊助が直首を切落す、見届けの役相済んで一同お引けになる
親類春日佐太郎と云ふ人涙を流して死骸を棺に収め浅草門跡の
寺中神田山徳本寺へ送る五百石のお旗本の見送るものに云つま
ら一人もない只だ佐太郎一人、途中はお話しもなく本堂へ其棺を
据ゑ上た時に先刻からお待ちなすつたお連合のおやを殿棺の蓋

を取り離左衛門殿の浅ましい姿を見て落々と涙を流して在つし
たが懐中より短刀を取出してアワヤ咽喉へ突通さんとなす其時
春日佐太郎が　佐「御尤もではありますけれども跡へ残つて入ら
つしやいます善之助殿が定めしお歎げきあさるだらう善之助殿
は貴女が御自害なすつては如何にも善之助殿がお可哀さうに、さ
うかお止まり下さる様」と止められてお助りの毛を根元から
プツツリ切てお引取りなすつた、デ御法號の儀は『元良院釋以真居
士』と参詣するとなく『世直し大明神』と云ふ幟を立た、宗旨の者が非
名のあるものを世直し大明神といふはどうも怪しからん事だと
職なを取拂つて墓参詣無用たるべしと掛札をした、シテ見ると
善左衛門殿は天下のお爲めに一命を抛つたに相違ない、山城守の
お寺と云ふのが駒込の祥林寺でサア吊礼と云ふ時には石を投げ
たり瓦を打付たりするものがあつた、扨お父さんの傳右衛門殿は
番町の加藤伯耆守と云ふお方の屋敷へ引取られ、善左衛門殿の跡

お秋殿が水戸の治保公へ書面を差上たに依つて何者へ申し付けたものか田沼の怒ひが廣大だに依つて容易の者には務める事が出來ません、茲に奥州白川に於て十一万石松平越中守殿後に細川樂翁と仰つしやいました此お方は田安中納言様の三男で御養子に入らつして越中守、此お方は申すまでもない御名君、之を其小石川のお屋敷へお招きなすつて扨田沼の一件を斯々斯様其許へ申し付るに依つて田沼を取押へてくれと云ふお頼みを請けをいたすかと思ふと

越家來共に相談を仕まつりましてお受けをいたしますと十一万石を自分一人の物と思つて居ない、お戻りになつて國表へ早飛脚を立て、吉村彌左衛門、服部半藏の兩人をお召しにあつた半藏と云ふ人は元德川様のお旗本で山王様の脇に半藏山と云ふが殘つて居る天正の十八年家康公御入國になつた時に趣町の御門を預かつたに依つて之を半藏御門と云ふ吉村彌左衛門は元福島の家來で福島家が改易になつて後浪人をして居たのを

お抱へにおつたので今此二人をお招きにおつて御相談に相成ると兩人が之は御辭退を遊ばしてはなりません身命を抛つてお務めを遊ばしてお宜しうございます

越「夫れではお受けを仕やう」とおつた、會津の肥後守と夫から松平讃岐守、松平越中守之れか天下輪佐の臣自分は御老中でないから御老中になつて御老中になつてから此のお方が始めて御老中になつた此お方が餘り御倹約でおつたに依つて一時は下方の訴判の悪い事があつた、其時分に出來た落首

白河の清き流れに住よりも
濁る田沼の水ぞこひしき

其越中守が登城をすると田沼はブル〳〵と顔へ上る様だが病氣と云つて二日でも三日でも出ないと云ふと又田沼が大きな顔をして威張つて居る其時に出來た落首が

越中の紐が殺んでたぬまらが
またむく〳〵と頭持上る

十代將軍家の御病氣の一点に就て田沼の惡事を見聞はして取て押へ遠州相良と云ふ處へ城受取として岡部美濃守を呼にも『見た』か見附の貝釋子背負つたか相良の陣太鼓』と云ふのは此時出來た御周勢は左のみ立派ではないが御先祖岡部六彌太以來の陣太鼓を背負て往つた『倉見源太夫と云ふものが城渡しをして四万七千石の處を三万七千石減高仰付られて一万石となつたアお命には別條もおかつたが田沼殿の年來の惡事が一時に露見をいたし御子息を失ひ御自分は減高と相成つて事相濟みましたに依て當騒動之にて局を結びます

田沼騒動終

明治卅一年三月廿五日印刷
明治卅一年四月五日發行

田沼騒動

發行者　浅草區南元町廿四番地　三輪逸夫郎

印刷者　浅草區南元町廿四番地　本城松之助

發行所　浅草藏前南元町　いろは書房

桜林伯知口演

○松平長七郎　正價金廿錢　郵稅金六錢

放牛舍桜林口演

○谷中聽會院　春雨譚　正價金廿五錢　郵稅金六錢

今村次郎編輯

○講談倶樂部　正價金十五錢　郵稅金四錢

桜川薫林口演

○仇討饒山實記　正價金廿二錢　郵稅金六錢

歸城齋貞玉口演

○鶯塚復讐美談　正價金廿五錢　郵稅金六錢

伊東波瀾口演

○四代目小柳平助傳　正價金廿錢　郵稅金六錢

遊谷子著

○滑稽和莊兵衛　正價金十二錢　郵稅金二錢

神田伯龍口演

○自來也　正價金廿五錢　郵稅金八錢

講談速記口演
○笹川賢婦傳　正價金十五錢　郵稅金四錢

講談大師口演
○因幡小僧新助　正價金十五錢　郵稅金四錢

講談師真玉口演
○稲妻相模　雙の仇討　正價金十五錢　郵稅金八錢

一錢虎可侯著
○大悪人　正價金十五錢　郵稅金四錢

探偵實話
○澁谷村殺人　正價金三十錢　郵稅金六錢

高田報社編輯
○大隈侯爵　千坂光子　正價金廿五錢　郵稅金八錢

探偵實話
○お國ころし　正價金三十錢　郵稅金六錢

中央新聞社編輯
○探偵奇聞　忠犬實話　正價金廿五錢　郵稅金六錢

097334−000−3

特9−77

田沼騒動

神田伯山／講演

M31

DBS−1205